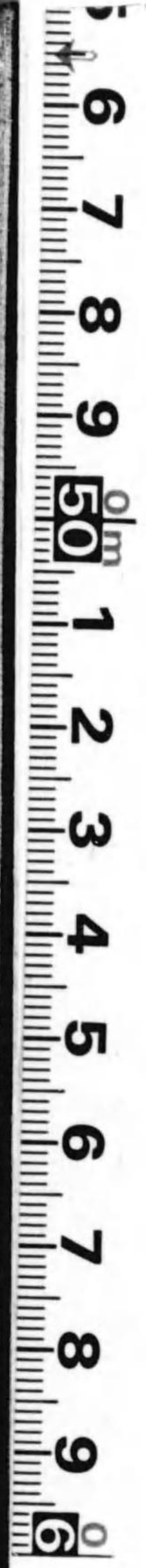


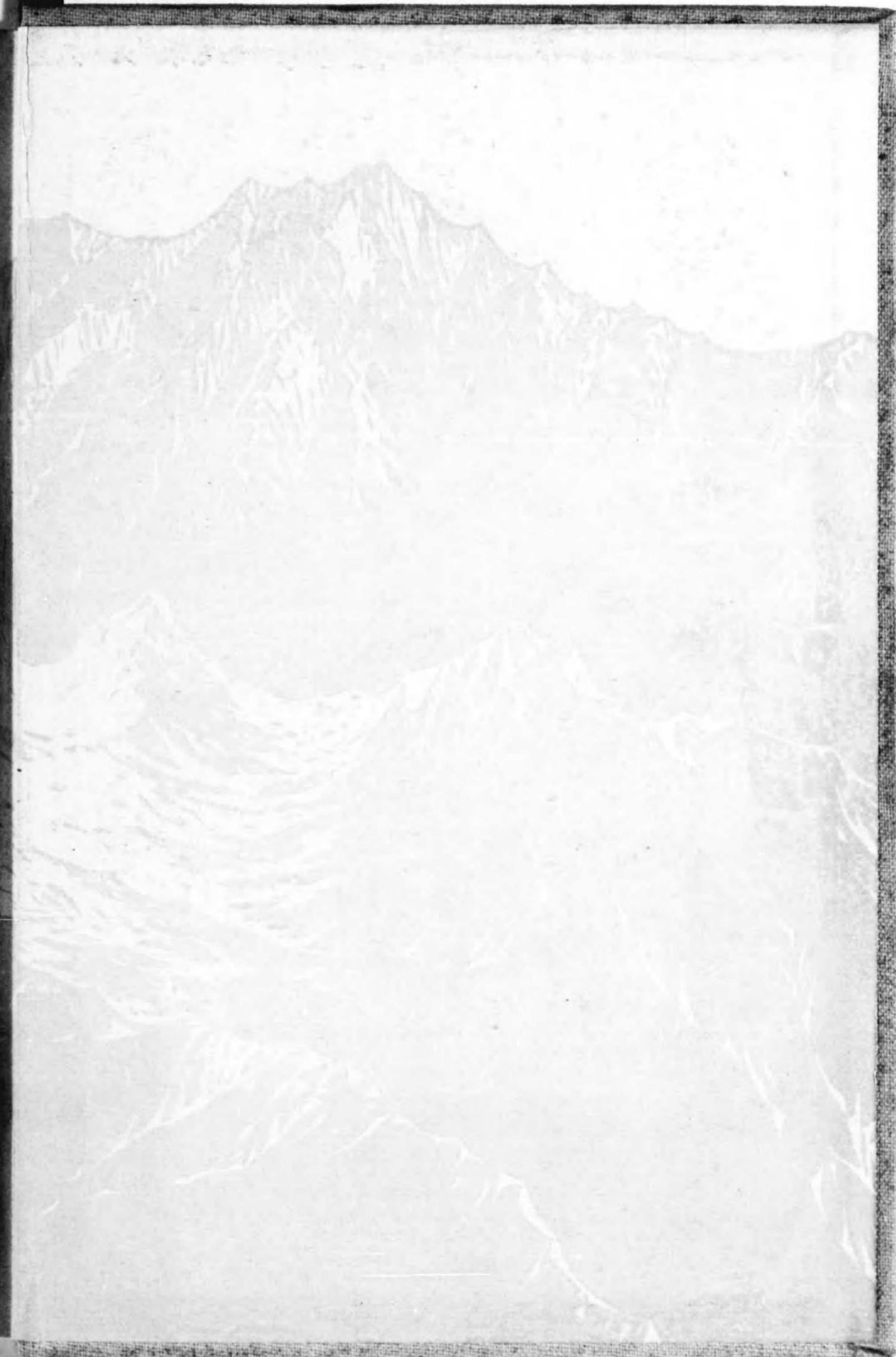
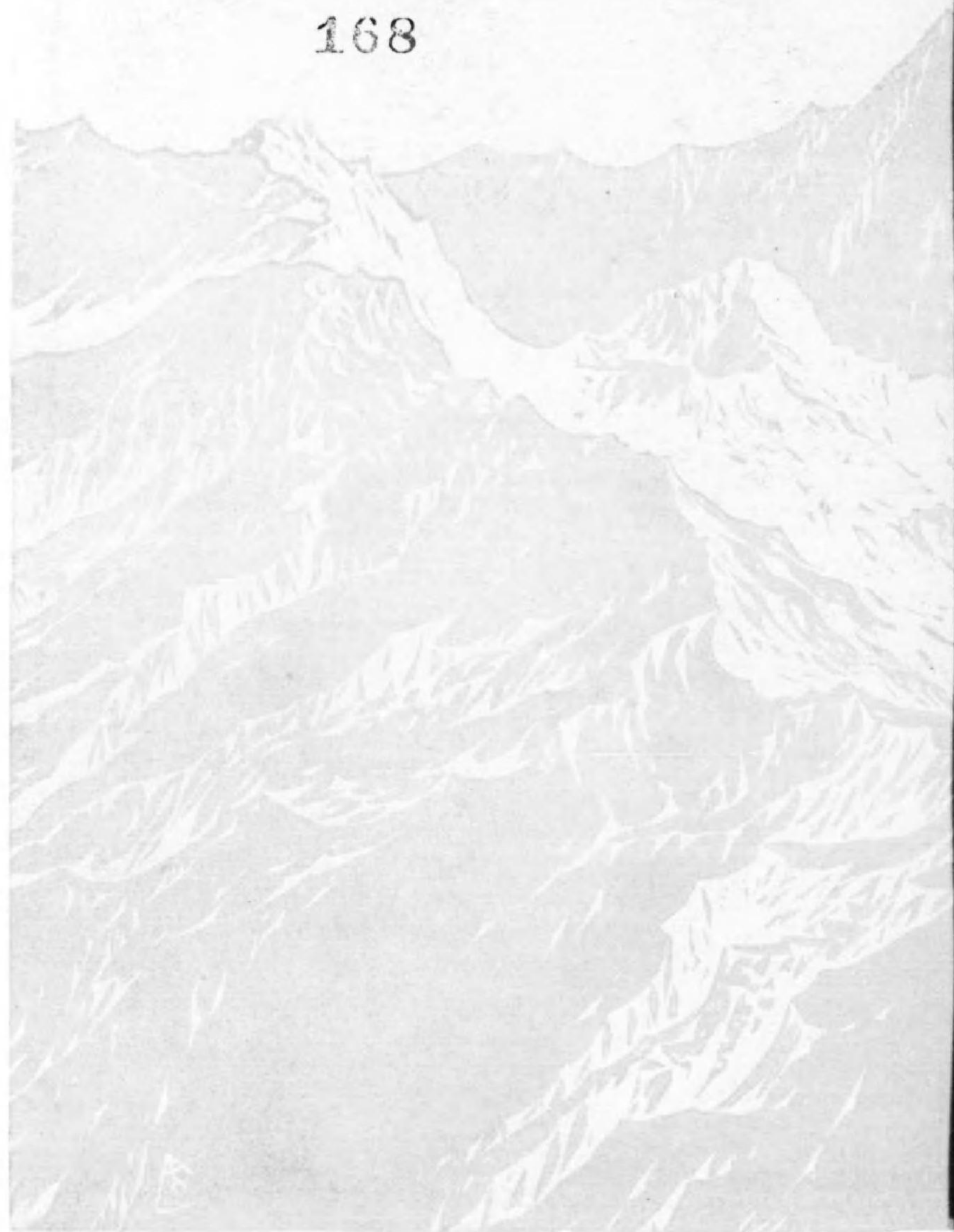
326
377



始



168



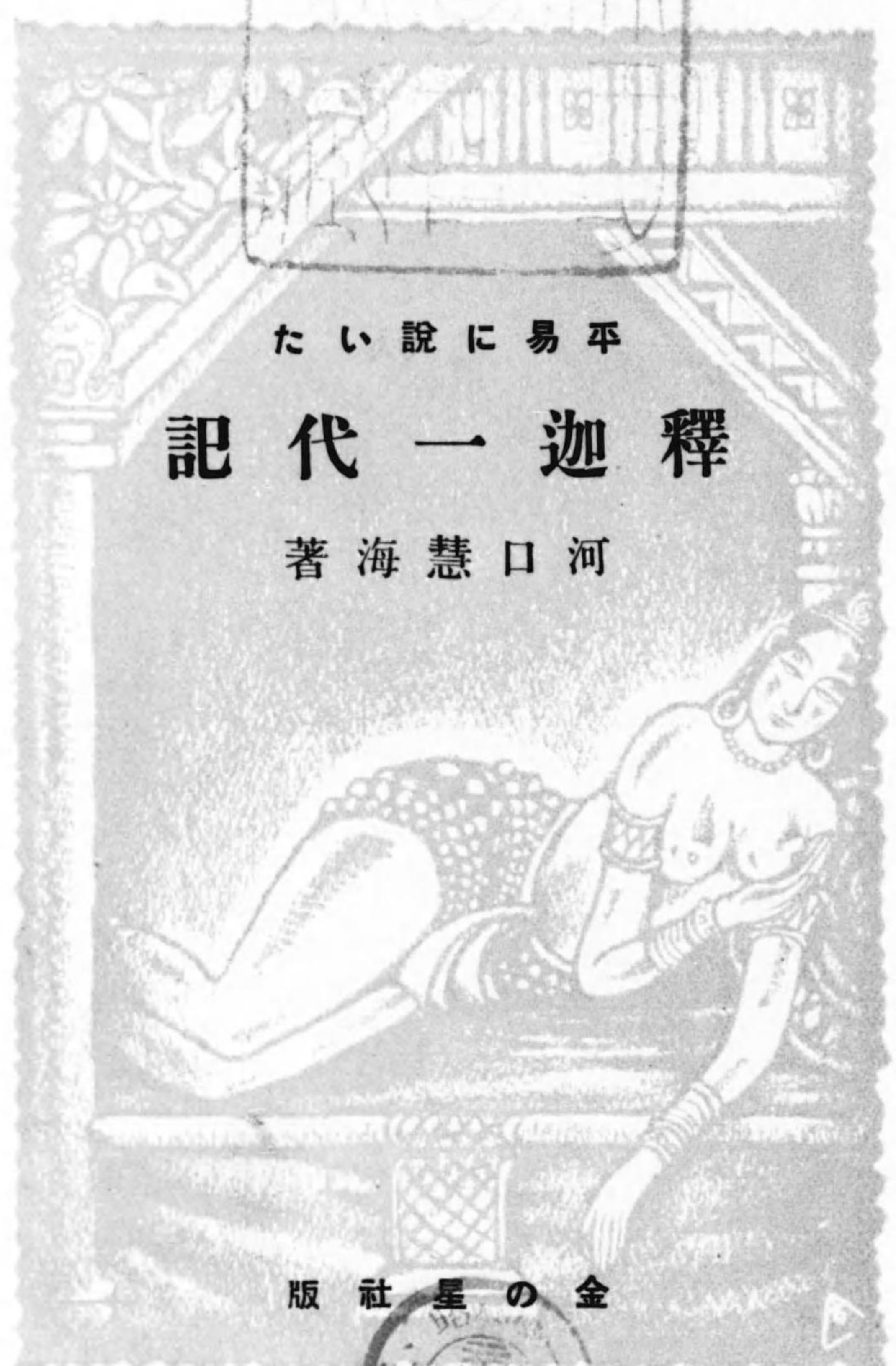
特 232
112



平 易 到 說 記

釋 迦 一 代 記

河 口 慧 海 著



金 星 社 版





[[(吹六十五百千八萬二拔海) 峯雪ガシセンエチシカ部一の中脈山ヤラーラヒ))
うはつせ
ぶ
うちくのみんき

釋迦一代記の序

喜馬拉耶山上の月と印度洋の水は、自づから清明と雄大の徳を現してゐる。この山水の間に在る印度大陸に生れられた、釋迦牟尼佛の清明は、喜馬拉耶山上の月よりも高明に、その雄大は印度洋の水よりも絶大である。このやうに超絶した清明雄大の妙徳を有つて居られるお釋迦さまの傳記は、非常な名文の大家が、縦横自在に筆を振ふても、容易に寫し得られるものではない。それを金の星社の社長齋藤童友居士は、不文非才の余に對して、以下に擧げるが如き條件を附して、釋迦牟尼佛傳を著述することを請求せられた。

第一、子供が讀んでも解るやうな釋迦牟尼佛の傳を著述してもらひたい。

第二、佛教は教理が廣大深遠であるために、佛傳中是非ともなくてはならぬ説法が省略せられてゐる。假令ひあつても、甚だ解し難い。これ等は抜き

にせず、十分に解り易く説明して傳中に入れて頂きたい。

第三、從來の釋尊傳には到底常識で解すことの出来ない、怪奇幻空なことが多い。これは現代人が常識的に解し得られる正確なる事實に基いて、その傳を著して頂きたい。

第四、宗教的偉大なる道徳を具有して居られる釋迦牟尼佛であるから、その廣大無邊なる點を十分に傳中説明して頂きたい。

第五、佛敎の開祖としての釋尊傳が、各國民の習慣や各宗派の思想に支配せられてゐるものが、多くあると聞いてゐます。そのやうな偏見は皆除かれることを希望致します。

第六、摩訶不思議なることでも、如來の在世に實際あつたことと信ぜられる理由のあるもので、宗教的に實現の可能性あるものは、總て表して頂きたい。

第七、從來の佛傳には地理や年代や人名などが、實際と違つてゐるものが、甚だ多いと聞いて居ります。これ等は總て正當なる根據あるものに依つて、誌して頂きたい。

と云ふやうな希望的要求があつた。これは随分六つかしい註文である。併し正しい要求であつて要を取つて言ふと、解り易い誤謬のない正しい佛傳を著はしてもらひたいと云ふことが主眼であつた。けれどもこれ等の要求に隨つて、如來の廣大無邊な道徳を叙することは、到底不可能であらうと思はれる。何ぜならば如來が有せられる無限の道徳を、有限なる範疇内にある筆に收めることが不可能だからである。

さりながら童友居士が希望せられた條件内に於て、その徳の一端を現すことは一心に努力したならば出来ないことはあるまいと思ふたので、居士の依頼を受けて釋迦一代記を著さうとしたのが、數年前のことであつた。それから居士より

目次

一	お釋迦さまの誕生地………	一
二	お釋迦様の御先祖………	四
三	誕生の準備………	七
四	誕生………	二二
五	阿私陀仙人の觀相と豫言………	二七
六	文學武術の上達とその遊戯………	三三
七	理想の妻とその撰擇………	三八
八	自撰結婚………	四四
九	悉達太子の洪水救濟………	五九

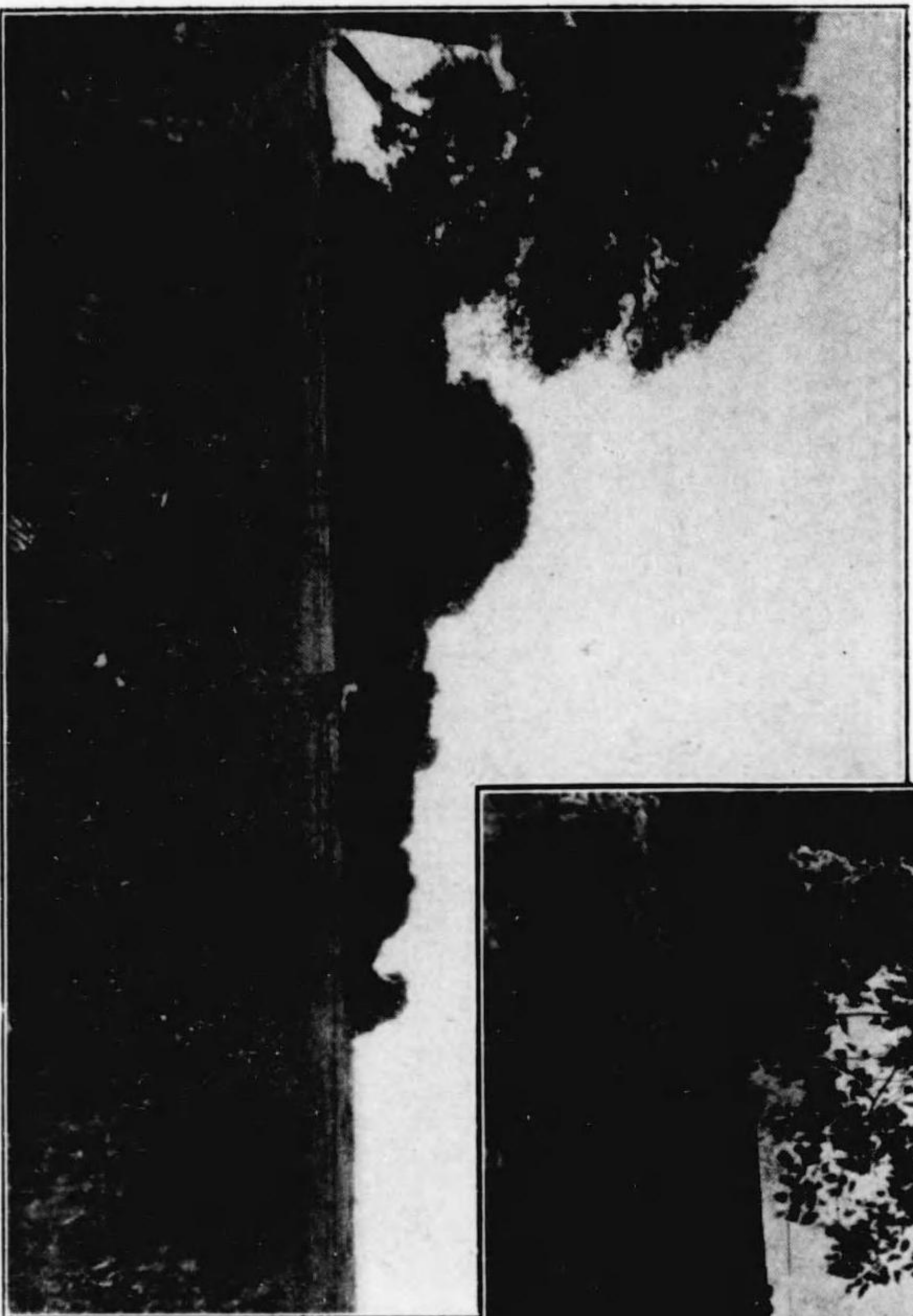
一〇	四門出遊	………	四
一一	太子出家前の防衛	………	四
一二	悉達太子の家出	………	五
一三	太子の求善知識	………	六〇
一四	六年苦行	………	六六
一五	降魔と成道	………	七三
一六	最初の信者	………	八三
一七	最初の説法（初轉法輪）	………	八五
一八	三大行者の教化と頻毘沙羅王	………	九三
一九	二大弟子と大迦葉波の得度	………	九六
二〇	火生長者の得度及び長爪梵志の得度	………	一〇八

二一	祇園精舎の建立	………	一〇八
二二	波斯匿王及び其夫人末利の歸佛	………	一一四
二三	如來父大王に遇ふ	………	一二五
二四	釋迦族多數の出家	………	一三三
二五	淨飯大王の崩御と婦女子の出家	………	一三七
二六	善星比丘の邪見、阿難陀侍僧となる	………	一四三
二七	外道六師の神通挑戦	………	一五〇
二八	如來大神通を現して六師を降伏す	………	一五七
二九	佛陀女性の化度	………	一六九
三〇	指鬘波羅門の入道	………	一八八
三一	長者の萬燈貧者の一燈	………	一九九

三二	提婆達多 <small>テイバダツタ</small> の破和合 <small>ハワガフ</small> ……………	二〇二
三三	提婆達多 <small>テイバダツタ</small> が世尊 <small>セソン</small> を殺 <small>ころ</small> さんとす……………	二〇九
三四	阿闍世王 <small>アジャセワウ</small> の懺悔化度 <small>サンケケド</small> ……………	二一四
三五	吠舍離國 <small>ワイシャリク</small> 難攻不拔 <small>ナンコウフバツ</small> の七原因……………	二一八
三六	入滅 <small>ニョメツ</small> の宣言 <small>センゲン</small> と正法 <small>シヨウホフ</small> の附屬 <small>フゾク</small> ……………	二三〇
三七	入 <small>ニョ</small> 涅槃 <small>ニハツ</small> ……………	二三三

平易ヘイイに
 説いた
 釋迦シヤカ一代ダイ記キ
 河口慧海カクワヱ著

1912年



[[佛陀誕生地ニモスル全園景]]



[[摩耶夫人堂中の尼孫蓋]]

一、お釋迦さまの誕生地

「あれ御覽なさい。實に雄偉い景色でせう。あの白雲のやうに見へる全體が、世界で最高最大なヒマーラヤ山脈であります」

と今しも印度はお釋迦さまのお生れなされた聖地で、ネパール國中薄伽梵町の郊外、藍毘尼苑の丘上に立てゐる參拜者の一人實藏と云ふ人が、同行の感三と名づける人に云ひました。すると感三はカラカラと笑ふて云ひました。

「そんな空想を言つて人を欺いても徒目だ、あれは大きな山のやうな雲じやないか。現に動いてゐるのが判然と見へてゐる。もし僕が立派な山だナーと感心したらば、君はハハハと笑ふのであらう」

實「イヤ動いてゐるのは全く雲ですが、白く光つてゐるのが、雪の峯々即ちヒマーラヤ山脈であります」

感「何を言ふのだ。名も何もない雲を捉らへて、ヒマーラヤ山脈だなんて……第一

あんな高い山があつてたまるものか」

實「高いのは當然であの真東に見えるのは、世界第一のエブーレスト高雪峯で、海拔二萬九千二呎で、それから東北に續いて聳へてゐる諸雪峯は、ゴサイクンダ、ゴサイタン、ヌブリ、ニーシヤンなどと云ふ、海拔二萬二千呎から、二萬六千呎までの山々です。そうして真北に屹立してゐる魚尾のやうなのが、マチブサ雪峯で、次に高く並んでゐるのが、海拔二萬六千七百呎の純白雪峯、その次が解脱性雪峯で、遙か西北の空に群青山脈の上に孤立してゐるのが歡喜雪峯です。これ等は皆ヒマラーヤ山脈中の雪の峯々であります。我等のお釋迦様はこの宏壯極まる偉觀の淨土に、御生れなされたのは偶然じゃありません。我等のお釋迦様はこの宏壯極まると實藏は敬虔に溢れて、眞實を込めて、淀みなく説明しましたけれども、感三は憤然として叫びました。

「お釋迦さまは此雲の中で生れたと云ふのですか。二千五百年の古昔もこのやう

な叢雲か出てゐたと云ふのですか。何の證據あつて此叢雲に雪山の名をつけるのか」

實「證據は自分が西藏へ行く時に、この山脈中を跋涉し、特にこの純白雪峯の北溪、ロー、ツアラン山村に一ヶ年半程滞在した實驗であります。現にこゝにはこのやうにお釋迦様の誕生地であることを誌した、無憂王の建立せられた大石柱があります。御覽なす」

感「實驗だなんて、夢のやうな實驗が何の證據になるものか。雲だ雲だ動いてゐる。雲を掴へて雪山だなんて——もう君と話しはせなす」

と云ふて感三は怒りながら、摩耶提希堂の方へと行きました。二人は半日程無言で石柱の碑文を石摺りしたり、摩耶堂の大きさを測量したりなどしてゐましたが、其間にも感三は自分で雲だと言張つた山々を、たび／＼見てをりましたが、雲は動いていろ／＼に形を變化しましても、山は泰然として元のまゝの姿勢でをりますので、

彼は到頭降参して寶藏の前に頭を下げて謝罪しました。

「ヤー先程は失敬いたしました。實に驚きました矢張り雪の山々でありました。なる程雲は變化しても山は依然として山です。僕は只今寫生しますからあの山々の名を今一度聞かして呉れ給へ。實に濟まなかつた。ナントお釋迦さまは高大無邊な中心に生れられた者だナー」

寶藏と云ふのは著者自らの名で、感三と云ふのは同行の友人であります。この記事は明治四十年の二月に著者自ら親しく實驗した事實談であります。古語に深山大澤龍蛇を生ずと云ふことがありますが、實に我等のお釋迦様は、宇宙絶大の莊嚴美を聚めた藍毘尼苑に生れられた。至上の妙人絶大の妙境に生るとは此事を申すのでせう。

二、お釋迦様の御先祖

我等が敬愛する我國皇室の御先祖は、高天が原と云ふ天上からお降りになりました

た。それと同じやうにお釋迦様の御先祖は、光音天からこの世界は印度の國に降られたと傳へてゐます。この天上の神々は談話をするのに聲を用ひずして、口から光線を放つて話をしますので光音天と名づけられました。

地上に天降つた神々は、初めの程は天上と同じやうな生活をしてをりましたが、次第に心の福分が薄くなりまして、滋味を欲するやうになつて有形食の甘露味を味ひましたので、腹内から大二小便を出すやうになりました、身から出す光明もなくなりまして。段々神の福分がなくなるに随つて、甘露精がなくなつて地膚が出来、それがなくなつて林藤が出来、それがなくなつて自然米が生じました。

食物が有形の粗いものとなつたので、男女の形も判然として欲が出て夫婦の道も立ち家屋も出来ました。自然米を一人で澤山に蓄へる人が出来ましたので、自然米も生じなくなりました。

それから人々は田地を耕して米を作るやうになりました。ところが横着者が出ま

して、他人の耕作した稻を竊に刈つて盗みとることを敢てしました。そのやうなことが度々起つて、人々が苦みましたが人々が集つて、光音天の子孫で最も智慧ある徳の高い人を選んで、王と立てまして三摩多（平等許）王と名づけられました、不正を戒しめて平等に人民を護られました。

「何ぞお釋迦様の姓を喬多摩と申しますか」

それは世界最初の三摩多王から幾萬幾千代を経て、その遠孫カルナ王は西印度國は、ナルマダ河の河口に在る普陀落城市に居られた。彼王の子に名高い喬多摩仙人があつて、その師のカーラ仙人の神通力に依つて、男子が出来て遂に王位に登つた。その子供が卵形の時太陽の力で温熟せられ、生れて甘蔗苑の中で生長したので、その姓を喬多摩とも日種とも亦甘蔗とも云ふのであります。

その王統が數百代を経た後、普陀落城に増長王と云ふのがゐた。その王に四人の子があつたが、彼等の母であつた王妃が亡くなつた。その後増長王はもし男子が出

来れば、王位を繼がせると云ふ約束の下に、隣國の王女を後妻として迎へた。然るにその後妻に男子が生れたので、矩面王子等の四人の王子は遂に國を追はれる事になりました。

第四寶釧王子の子孫が迦毘羅城に五萬五千代相續して、十車王が出られた。この王に十二人の王子があつて、その末子が師子頰王で、この王に四人の王子があつて、長兄が淨飯大王とられた方で、お釋迦さまの御父さんであります。

印度國最初の王三摩多から淨飯大王に至るまで、十二萬一千五百十四代を経たと律文の書に誌してあります。尙ほ外の典書には十萬九千七百五十三代を経たとあります。何れにしてもお釋迦様の御先祖は、印度で多くの世代を経たことだけは確實であります。特に光音天から續いて、古い正しい王統を相續してゐた、名譽ある系統であることも明かであります。

三、誕生の準備

大木は一朝一夕には出来ない。幾百幾千年間、雨を凌ぎ暴風に堪へて、遂に雲を突く巨樹となるのである。至高至大なる光と徳とを具へたるも釋迦様も亦、娑婆往來八千返は愚か、幾百萬返もこの世界に生れ代り死に代りして、我等衆生向上のため生命を惜まずに御盡し下されて、遂に今より二千五百年以前に佛と成られて、大恩教主釋迦牟尼如来と成られたのであります。

王「ア、これ／＼何うするぞ。われ等は危険じやないか」

と今しも大象が牝象の求交臭を嗅いで、酔狂して奔り出したその象の背に乗てゐる明名王が、驚きながら象御師に云ひました。

御「ハイ何うぞあの前に見えます樹の枝に、跳びついて象から離れて下さりませ。でない限り御生命が危ふ御座います」

王はその枝に飛びつき象御師も亦夫の枝に飛びついて、象から離れて助かりました。併し王は非常に怒つて象御師に云ひました。

「お前は何故に善く馴らしてゐない象に我を乗せたか。我生命を危くしたその罪は死刑に相當するぞ」

御「臣は象の身體を能く馴らしましたが、その心を馴らすことは、臣の能くする所ではありませぬ」

王「その身體を馴らした證據は何處にあるか」

御「それは七日の後に象が必ず歸て参りますから、その時御覽に供へます。それから七日経て象は交尾期が済みましたので、王宮に歸りました。象御師は大王大臣等の前に於て、兼て火で灼いておいた赤き鐵棒を象の前に置いて、彼御師は

「食へ食へ」

と命じました。すると象はそれを嫌ひながらも、それを食ふために鼻先きで摘んで、口へ持つて行つて火焰のために大喚聲を放つて仆れました。王は感じて尋ねました。

王「さて誰か善く心を馴らす者があるであらうか」

御「それは佛さまのみが出来ること御座ります」

そこで王はその時代の佛さまに随いて、自分が總ての悪い心を善い心に變へ、一切の人々に財寶や徳を施しまして、多くの人々を立派な正しい道に導きました。

この王がお釋迦さまの昔し昔しの前生でありまして、佛に成られる最初の原因である菩提心を起された始であります。このやうにお釋迦さまは、三大無量劫の古い古い昔しから、道心を起されて數限りなくこの世に生れ出で、或時は醫師となり或時は教師となり、又或時は將軍大臣などゝなつて、我等衆生の最上不變の幸福のために、智を研ぎ徳を積み、身命財産を捨て、御盡し下された。その結果佛の位を繼ぐべき大菩薩となつて、正白頂と名づけられて觀史陀天に居られました。

今より大約二千五百年以前には、印度國は世界で文化の進んだ國家の隨一でありました。五大科學も起り十八の小科學も盛大で、九十六種の異なる哲學まで勃興し、

それがために疑惑心が盛になつて、人々が不安に陥りました。亦正しい智慧がないために利己心が強大で物慾を恣にするので、人々は皆昏昧となつて苦みしました。

そこで正白頂菩薩は觀史陀天に於て、この世界の實情を見て、自分が世界に生れて闇冥に苦む衆生を、救はねばならぬ時が來たと考へられました。

時が來た、世に出現の時が來た。さて何れの國、何れの種族に、誰を父母として生れ出づるかと云ふ事について、考へられました時に、印度で正しい清淨な王族は、釋迦氏の外にありませんでした。さうして當時釋迦氏の淨飯大王とその王妃摩耶夫人とは、共に道徳實行に勝ぐれた方であることを見られましたので、この二方を父母として此世に生れようと思はれました。そこで彌勒菩薩を自分の後繼として、天上の神々に別れを告げて、この世界に降ることになりました。

時に人間世界に於ては、印度國は大雪山で莊嚴せられた迦毘羅國の迦毘羅衛城の宮中に於て、摩耶夫人は七寶の牀上に御眠りになつてゐると、遙かの天上から六牙

の白象が天降り来て、夫人の右脇から胎内に入られた。自身を見ると七寶の璽珞を掛けながら虚空に立ち、その上七寶の高山に登つて、世間の高山などを遙かの下に見てゐると、四方から多数百千の人々が、自分に對して禮拜してゐると見て夢が覺めました。

夫人は自から心も晴晴して衣を更めて、淨飯大王の御前に行かれて、夢のことを申し上げられました。大王は驚いて占夢博士に不思議な夢について尋ねられました博士は

「皇后さまは三十二の大人相を具へた王子を懷妊せられました。この王子は王位に即かれるならば、轉輪聖王即ち四天下を統一せられる、世界的大王となりまじやう。出家せられたならば無上正覺を悟つて佛陀となられましたやう」と申しあげましたので、大王も夫人と共に大にお歡びになりました。

四、誕生

本年即ち昭和四年より二千四百八十九年以前の四月十五日、吠舍迦滿月の日(陰曆四月十五日)は、正さしくお釋迦さまの誕生せられた年月日であります。丁度來る昭和十五年の四月十五日は、釋尊誕生二千五百年に相當してをります。この時には私どもはこの世界に大意義ある一大聖人の、降誕二千五百年を大に祝せねばならませぬ。

さて十一弱の二千五百年以前の四月十五日は、實に天竺晴れがして、曉天より雲多いヒマラーヤ大山脈の雪の峯々にも一點の雲なく、東方より西北方に至るまで、昭明と妙の容姿を大空狭しと現してゐる。東南より西方に至るまでは、印度の平野が雲と土地と接する際限まで、限りなき平坦の原野で無限の平和を現してゐます。この天地の大觀を一眸の中に集めた藍毘尼苑は、摩耶夫人の母藍毘尼のために、彼夫人の父であつた天爾城主善覺王が、造つたものであるから藍毘尼苑と名づけられた。

この日早朝から摩耶夫人は印度の習慣に随ふて、天爾城に歸つて初産をしようとして、兼て大王の許しを得てゐたので、多くの姝女や臣下を随つて出立せられた。途中天爾城の國境にある藍毘尼苑に來られた。

行路はその前に掃除し香水を撒き花を散したれば、美しく清淨であつて、特に藍毘尼園は黄金花、相思花、素馨花、果王花、無憂花、などが今を盛りと咲き匂へる上に、池には青、白、赤の色光を放てる蓮華が清風に動いてゐる。この清淨美妙の莊嚴境を見られた摩耶夫人は、車を停めて苑中に御歩びになりました。

摩「何と云ふ美はしい花でしやう」

と仰せられながら摩耶夫人は、無憂樹の一枝に御手を掛けて、その花を探らんとし給ふ時、忽然として何のお苦みもなく、王のやうな王子が御誕生になりました。未剖判の天地を破るやうな至大の一聲。

「オギヤ」

は心ある人、智ある仙人等の耳には

「天上天下 唯我獨尊」

と聞えました。この聲は人間自性の獨立、本來性具の自由を闡明宣揚する聲と聞えました。これ程尊い聲は嘗て人間世界には表はれなかつたものであります。これまでは人間は神の奴隸でありましたが、お釋迦さまがお生れなされて、人間には世界で一番尊い佛性のあることを、教へて下される世界最初の聲であります。

この世界の最大聖人の誕生を心から喜んだ天地自然は、諸種異様の花を以て天地を莊嚴し、郭公は覺空を叫び、鸞は法華經を歌ひ、慈悲心鳥は大慈大悲の御心を讃ずるなど、各種の聲で各種に讚歎供養してをります。

ヒマラーヤ雪峯の空には、紅寶、金剛、金、銀、瑠璃、玻璃、砗磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀の十寶色に光れる山雲は、大供養雲を頂上に捧げてゐます。このやうに天地の自然が一齊にお釋迦さまの誕生を祝ひました。

御誕生のことを早速宮中へ特使を以て報告しますと、淨飯大王は非常の御喜びで、直に命じて儀仗を整へ、多數の釋氏臣下を隨へて、藍毘尼苑へお越しになりました。

お釋迦さまの偉大なる生の力が發揮せられまして、同月同日に印度の四大國王には各一人の王子が生まれ、劫毘羅衛城宮中五百の官人には、五百の男子が生まれ、五百の大臣軍人には各一人の男子が生まれ、その臣下等には五百の女子が生まれました。

又同月同日には城中五百の大象には、五百の子象が生まれ、五百の良馬には五百の子馬が生まれ、五百の牛には五百の仔牛が生まれました。遠近の諸國からは諸種の獻上物があつて、期せずして總ての事が成就してゐた。この事を見られた父大王は

「吾子が生るゝに當つて、一切の事が成就してゐるから、その義に依て、太子の名を一切事成就と名づける」、

と仰せられてその名をつけられました。我國で悉達と云ふのは、薩婆悉達多の略稱であります。

お釋迦さまはこうしたヒマラーヤ山麓の宏壯美妙にして清淨極まる無憂樹の花の下で御生れになりました。

五、阿私陀仙人の觀相と豫言

ヒマラーヤ山中の香山に阿私陀と云ふ無想定を得た仙人が住んで居られた。それの弟子に那羅陀仙人があつた。那羅陀は雪山上の異様な瑞雲祥光を見まして、不思議に思ふて師の仙人の處に行つて、

「仙人さま、あの雪山上に見えまする異常の光輝は、何の瑞兆で御座りまするか」

阿「あれは本日藍毘尼園に於て、淨飯大王の摩耶夫人に一大聖人が生れられた、その瑞兆である。この大聖人は大抵一切衆生を最上解脱に導かれる佛陀となられるであらう」

那「そのやうな大聖人に拜謁を得たいと望みまするから、今より師の仙人に隨行い

たしたいと願ひまする」

阿「それは彼聖人が宮中に還御せられてから後でない、拜謁の機會を得ることが出来なう」

と、このやうにお釋迦さまの誕生は、ヒマラーヤの山奥に住んでゐる、隱者仙人までも驚かしたものであつた。誕生後七日を経て淨飯大王摩耶夫人を初めとして太子さまも俱に宮中にお歸りになりました。その日摩耶夫人は御逝去になりました。その後は夫人の姉君憍曇彌夫人が實母に代つて、お太子さまをお育てになりました。古昔から印度國の風俗として、子供が生まれると觀相家に、その人相を觀てもらふて、一生の運命を判斷してもらひます。それで喬多摩王家におきましても、博識の婆羅門を召して觀相せしめました所、彼はつらく、太子の相を觀て、

「三十二相八十種好を具へられた立派な相であります。轉輪聖王となられるか、正覺成道の佛陀となられましやう。尙ほ詳しく確かなことは、香山の阿私陀仙人

人に御尋ねになれば、判然と致します」

と申し上げましたので大王は何うして人を香山に遣はしたものと心配してをられました。所が香山で阿私陀仙人は、

「我等は聖人に遇ひに行くべき時が來た」

と那羅陀に告げられ、俱に空を飛んで迦毘羅衛城の方へ向ひました。丁度迦毘羅衛城外の虚空より城内に入らんとすると、兩仙人は聖人の威神力に壓されて、飛ぶことの通力を失ふたので、地上に降りて歩んで宮門に着いて門衛に、

「我は香山の阿私陀仙人である。大王に奏上してくれよ」

かくと聞かれた大王は大に喜んで、早速阿私陀那羅陀の兩仙人を、宮内奥深く謁せられて、太子の保母をして太子が仙人を禮拜する式を行ふ様に命ぜられると、仙人は急にそれをさしとめて、

「少頃お待ち下さい。我等こそ禮拜すべき身分であります。世界の大神人をして

拜せしむることは出来ませぬ」

と云ふて太子のみ足の下に頭をつけて禮拜して後に、つらくと太子の御相を眺めてをります中に、感極まつたと申しまするか、はらくと涙を止め度なく流しました。それを見られた大王は御心配のあまりに、

「仙人どの、我太子に何か不祥の相でも表れてをりまするか。何故涙を流されまするぞ」

阿「大王よ、不覺の涙を流して相濟まぬ、太子さまには不祥の相は何も御座らぬ」

王「然らば何故に涙を流されましたか」

阿「されば大王よ。太子さまには三十二相八十種好の善相あれば、將來家に居らるるならば四天下を統一する帝王となられるであらう。出家すれば世間出世間を指導せられる佛陀となられるであらう。然るに今太子の相好は最も明瞭に善い位置を得てをりますから、必ず正覺成道の如來となられる。けれども我は年既に百

二十歳、今後幾歳を経ずして死んで無想天に往生するであらう。それ故に我はこの一大聖人の説法を聞くの機會を得ませぬので、知らず覺えず落涙いたしました」

大王は仙人の言葉を聞いて一度は喜び一度は大に憂へられました。喜ばれたのは家に居るならば、四天統一の帝王になられると云ふことである。然るに仙人は必ず出家すると云ふた。そうなると誰に我王家を相續せしむるかと思はれて、大に憂へられたのであつた。

阿私陀仙人は大王を辭してから、ヒマラーヤ山中の莘陀山に入つて住んでをられた。十數年の後愈々死に終まれた時、那羅陀仙人及び餘の弟子等はその師に請ふて「師の仙人さま、私共は未だ常樂の解脱を得ておりませぬ。何卒それを私共に與へて下さる」

阿「我は久しく修めてゐるけれども、未だそれを得ないのである。無上妙樂の果を

得る甘露の法門は、今に淨飯大王の太子が出家して得られるのであるから、今より清淨に精進して待つが好い」

と遺言して亡くなられた。那羅陀仙人の本姓は迦旃延であつたから又の名を迦旃延と云ふた。彼は後に五百の仙人を率いて釋迦さまのお弟子となつた人である。

六、文學武術の上達とその遊戯

悉達太子が七歳になられた時、父大王は世の習慣に随ふて、太子さまを學校に入れることにせられました。一切友と云ふ書アルヴェイトラの學者、有得と云ふ數學者などについて書數の學を習ふことになりました。この學者等が太子様にいろ／＼と教へますると太子さまは、少頃の間にそれ等に通達して、尙ほ教師の知らない科學の深いことまで尋ねになつたので、教師等は恐縮しまして、

「これ以上太子さまには教へるものがありませぬ」

と申上げて教育係りを辭退しました。それから學術上のことについては、太子様

は廣い天下に敵がないと云ふ名聲が、世間に隠れなく傳はりました。太子様が十三歳になられた時でありました。或處で釋氏あろころの子弟しやくしが多く集りました時、太子さまの従弟である提婆達多アープタタが、威勢好く大きな聲で云ひました。

「オイ可難陀、悉達太子は學問ばかり修めてゐるから、學問では我等はとても叶ふまい。けれども武術力藝にかゝつたならば、我等の小指一本にも敵しまい……君は何う思ふか」

可「無論さうとも、學問ばかり修めてゐる弱い人間だ。あれで王位が繼げるかね」

提「一度彼と武術の競争をして見たいものだナ」

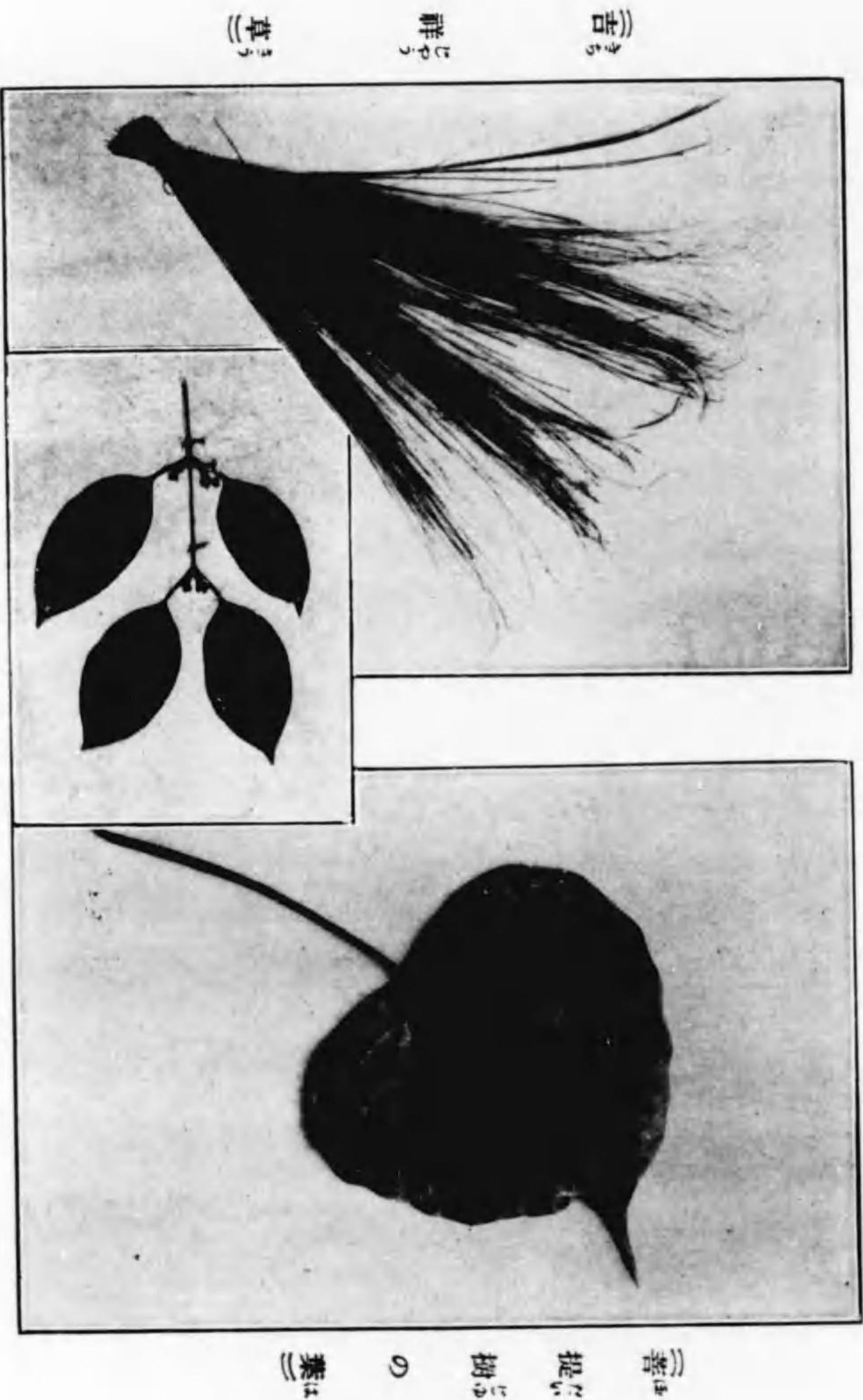
可「ナニ今に善い機會が來るであらう」

とこのやうな會話の事が宮中に聞へて、淨飯大王の御心を惱ました。それから太子をして弓術の博士に就けました。少頃にして太子は五種の弓術秘法を傳授せら

れて、その奥儀に熟達せられました。つゞいて劍術、體術、力伎等二十九種の武藝に通達せられました。悉達太子はこのやうにして、此時代に存在する文學武藝の總てに通達してゐることを示されたのであります。

太子は書數の學に通じたのみならず、天文學や醫學や工學や聲明などにも通じてをられて、特に深遠なる了解を有て居られた。その上歌舞音樂の類に至るまで、その蘊奥を極めてゐることを示された。

太子は文武兩道より諸種の藝術を修鍊する間暇には、郊外に遊びに出られた。ヒマラヤ山脈中妙白雪峰の麓には幽簡で美妙な景色の林苑がある。奥深い雪の山から流れて来る清い溪河もあつて、所謂る山水明媚にして幽雅清淨の境地である。太子はこの淨境を愛して屢々逍遙せられました。或時この靜地を吟行してをられますと、突然太子の御前に一羽の大雁が、矢に打たれて墮ちて來ました。太子は、「オ、可愛想に……」



と仰やつて直に雁を捉らへて、その矢を抜きとり侍童に携せしめた容器から、名薬を取出してその疵口に付けられた。すると見てゐるまにその雁は勢力を恢復しました。それで太子は雁の頭を撫で、

「今すぐに放つてやるから油断をせずに、目的地マナサル湖へ飛んで行けよ」と云はるゝや、大空高く彼雁を放ちました。雁は高い空で喜びの舞をまふて、北の方へと飛び去りました。少頃すると提婆達多は太子の前に來まして、

「今ここに墮ちた雁を返して下さい。あれはこの私が射たものであつて、私に屬してゐるものだから……」

太「なにあんな憐れな者は皆このわしに屬してゐる。何ぜならわしは總て憐れな者を、慈悲で射てしまつてゐるから。」

提「そんなことを言つても實際射落したのは私だ。私のものを太子が自由に放つ法はあるまら」

太「放つたのはこのわしだ。放つ力のある持主が、雁の自由に任かしたまでだ。雁の自由を奪ふ法は君にあるまい」

と云はれたので、提婆達多はグーの音も出ないで、怒りながらに立去りました。又或時郊外に出られて、農家の人の田畑にて耕作する實際を御覧になつて、穀物や野菜類も容易に得られない。勞力と汗の結晶であると知られて、一粒半菜も粗略に出来ないと觀られました。

そんなことを御考になりつゝ、閻浮樹の下にある石上に安坐せられました。その時眼の前に展開せられたものは、蛙が跳んでくると何處からが大いなる蛇が出て来て、その蛙を呑んで了ひました。すると枝上に止つてゐた雉子が降りて来て、その蛇を羽敲きで殺すか殺さないうちに、獵犬が跳んで来てその雉子に噛みつきました。

太子は驚いてそれを見て居られると、その傍には小鳥が小さな蟲を拾ふて喰ふて

をります。すると鷲が上空から疾風の如くに飛んで来て、その小鳥を引摺んで電光の如くに去りました。太子は歎息して云ひました。

「これは何んと云ふ淺ましい事であらう。強は弱を喰ふてそれからそれへと殺合をしてゐる。彼獵犬を使ふ人間も亦諸の禽獸を殺す。矢張り強は弱を食としてゐる。亦弱小國が強大國に攻伐併吞せられるのも同じ道理である。何うしたらこの大悲慘事を、救ふことが出来るであらうか。これが根本的原因を知らねば、これを救ふことは出来ぬ。一體何がこれ等苦惱の原因であらうか」

と沈思黙考日の西に傾くのも忘れて、禪慮をこらしてをられた。宮中に於て大王は「これこれ、未だ太子は還らぬやうだが、何か變事でも起つたのではないか」

侍「申上げます太子さまは閻浮樹下の石上で、晝前より禪定に入られて、何を申上げても御耳には入らないやうで、今以て一心に沈思してをられます」

王「それは困つたことだ。阿私陀仙人の豫言の如くに、太子は出家するために默考

するのではなからうか。何れにしても早速わが命と申して御迎へ申せ」
それで漸やく宮中に御還りになられたけれども、その後太子は毎々毎日それを宿題として考へて居られた。これが父大王の大いなる惱みの種となりました。

七、理想の妻とその撰擇

何うしたならば太子の出家を停めて、王位に即かしめることが出来るであらうかと、父大王は日夜に心痛してをられました。所が諸大臣等も皆同様に心配してをりましたが、一人の老臣は大王に奏しました。

「お太子様は最早十七歳にもなられましたから、彼方の御氣に召すやうな妃殿下を御迎へになつたならば善ろしいと存じます。さすればその愛情のために、太子さまにはその出家の意志を抛棄せられませう」

それから大王は太子が妻として望んでゐる婦人は、どのやうな娘であらうかと太子に御尋ねになりました。そこで太子から妻としての理想の婦人と云ふ趣意を歌とせ

られました。

性質不正で品行も
婦人は氏族は高くとも

悪く平氣で虚言をいふ
わが配遣に望まざる

同情慰安歡喜にて
年少美身で恥を知り
得らるゝ女のその徳を
かゝる娘のあるなれば

我に事へんたれにても
血統清き家系から
一々歌にてあらはさん
われ娶らんと思ふなり

義に理解なく反省も
いと年若き光潤に
それ等を誇る心なく

自制もあらぬは妻とせじ
健全美妙の身をもてど
母の赤子を愛する如

理想の妻とその撰擇

慈愛の心深くして

淨士乞士に供養する

誰をも見下げず侮らず
自欺嫉妬の思を捨て
夢のうちにも假初の
常に慎み恥知りて

虚榮や忿怒の心なく
正しき念を續けつゝ
あだし男を思はざる
自分の夫に満足する

尊大でなく卑屈でなく
我慢を離れ僭越を
美音芳香美味にさへ
無理に求めず我財に

中和の禮儀を善く習ひ
なさざる故に婢女のごと
貪着離れて酒飲まず
足ること知りて善く用ふ

正義を護りて邪曲の
衣を意につねに着て
御祭りさはぎを言はず
行ふわざを省みて

道に迷はず謙遜の
嬉々戲笑を樂まず
常に親しくおのが身の
徳つむことに勵むなる

意と口と身のわざも
昏きころは更になく
義理わきまへて善道の
精神の教師に事る如と
下男下女を使ふにも

いと清淨に睡眠にも
愚痴のことを考へず
業をば常に行へる
舅父姑母によく事へ
すべて我身を愛する如と

論書に誌せる式禮を

教師の如くに能く知りて

理想の妻とその撰擧

朝は早くに起きいで、

夕はおそく床に入り

母の慈愛の淨き如と

外見を離れて人々を

柔和しくもてなす乙女子の

あらば父上われうけん

父大王はこの歌を得てから、一の注意の歌を添へて、臣下の者に命じて、迦毘羅國中にこのやうな娘があるであらかと尋ねさしました。その注意の歌は以下の如くで、この歌は印度の國俗に對しては破天荒のことであつて、徳を主として四族の嚴別を無視した結婚の要求は、印度一般の人々を驚かせました。

王族と婆羅門族との區別なく

商族農族何れでも好し

たれにてもあれその徳の

かゝる娘のあるなれば

此に來よかしわれの子は

種族の區別を問はずして

實に道徳あるものを

喜び求めて迎ふなり

これが迦毘羅國の内外に評判となりまして、諸方からこの娘こそは彼歌の諸徳を具へた者ですから、御娶りになつて善しからうと云ふ報告が、澤山に集りました。假りに何れも同じ徳があるとしても、誰が果して太子の御氣に召すかは知れないのでそれを試みるために宮中に國の内外の多くの娘を集めて、太子自ら施寶する會を開きました。

美しい娘等は綺羅錦繡や寶玉を飾つて、列をなして太子の前に出ました。けれども彼等は皆太子の威嚴に打たれて、太子の御顔を見ることがすら能くせないで、太子から與へられる寶玉などを俯きつゝ受けて、怖づ怖づと外へ出ました。太子はこれ等の美人に對して、御眼一つ動かしませんでした。施物がすべてなくなつた時、耶輸陀羅（持名稱）と云ふ婆羅門能持笏の娘が出て、つらつらと太子の御顔を見て微笑しながら

「妾に下さる物のないのは悪戯でも遊ばされましたか」

太「イヤ悪戯はせない。そなたが遅れたのだ」

と仰やつて微笑しながら、價値百千金する寶玉入の指環を抜かれますと、耶輸陀羅女は階段を上つてそれを受けてから、

「妾の欲いのはこれだけじゃありませんね」

太「ア、そうか」

と微笑しつゝ、惜氣もなく、頸に懸けられたる眞珠の瓔珞を取つて與へられました。

耶輸陀羅女は

「ありがたう」

と喜びの色を表はし、太子に一禮して下りました。

八、自撰結婚

古來印度の結婚風俗に、自撰結婚、一名競技結婚と云ふことがありました。それ

は娘一人に婿八人と云ふ候補者の現はれた場合に、それ等多くの候補者をして武術を競技せしめて、それ等の總てを壓倒した者を、娘自らが婿として選ぶので自撰結婚と言ふのであります。

淨飯大王は太子が耶輸陀羅女に意のあることを知られて、耶輸陀羅女を太子妃に迎ふことを、彼女の父能持笏に申込みました。然るに既に申込者が多數にありましたので、愈々競技結婚を行はねばならぬこととなりました。

父大王は太子は果して、彼の豪傑揃ひの競技に勝へるや否やと、非常に心配せられてをりました。そうして太子はその事を知られて、父の大王に申上げました。

「父上さま、競技に私を遣はして下さりませ」

王「大丈夫かネー何分天下の豪傑が揃ふて居るから心配でならぬ」

太「ナニ大丈夫で御座ります。御遣はし下さりませ」

愈々黄道吉日を擇んで、競技を行ふこととなりました。この事が國中國外に知れま

したので、多くの求婚者が競争場に集つて來ました。その中には提婆達多、可難陀等の近親の者や、侍従の子烏陀夷など、多くの大力者がゐました。

吠舍離國梨身蔑族の人々が、將來四天統一の大王になられる相を有せらるゝ悉達太子に、美しき大象を献上するために率いて來ました。競技場に入らうとした提婆達多是、その象を見、且つその所由を聞いて、嫉妬の心がむら／＼と起つて、突然左手を延ばして象の首を握み、右手の拳を以てその頭を打つたので、大力に打たれた象はそのまゝ死んでしまいました。彼は笑ふて、

「この死象を汝等將來の四天統一の大王に献ぜよ」

と云ふて、場内に入りました。次に來たのは可難陀でありました。彼は死象の門前に横はつてゐるのを見て、

「これは通行の邪魔になる」

と云ふて死象を擧げて七歩の外に投げて入場しました。次に悉達太子はこれを見

て、

「この死象をこゝに置くならば、腐敗して皆臭氣に困るであらう」

と仰やつて象を兩手でさし上げて、城の壁外に遠く投げましたので、城外の空地に墮ちてそこが深く窪みました。それからその處を象谷と云ふて、後世そこに記念塔が立ちました。

競技場は無数の観客が集つて今か今かと待ち受けました。最早競技者も總て集りましたので、愈々開會となりました。初めに文學數學等について競ひましたが、誰も悉達太子に敵する者がありませんでした。

天女もかくやと思はれる耶輸陀羅女を見た競技者の若い豪傑等は各々腕を扼して

「ナニ學問では負けたが、今に見ろ、武術では太子を負かして見せる」

と熱情こめて叫んでゐました。然るに彼等は劍術、體術、投石、競走、高飛びなど何れも皆悉達太子に破られました。愈々武藝に於て最も勘要なる射術を競へること

となりました。初の程は大抵鐵的七枚拔を、一枚或は二枚を射抜く者ばかりでありました。提婆達多が出て鐵的三枚を打抜いたので觀衆一同は驚いて、

「ウワー、ウワー、ジャイ、ジャイ」

勝つた勝つたとはやしました。提婆達多は威氣揚々として座に着くと、次で悉達太子は射的場に出ました。淨飯大王と諸大臣は固唾を呑んで、瞬きもせずに見てをりますると、太子は祖父師子頰王の用ひた大弓で、今は裝飾としてあるその大ものに、大矢を番ふて鉦と放つと、鐵板七重の的を射通して、矢は地に突立ちました。これを見た諸大臣を始め大衆一同は、

「バラジャイ、バラジャイ」

大勝大勝と兩手を擧げて叫びました。後に矢の突刺してゐるのを引抜きまするとその跡に清水が吹出しました。それが箭泉と名づけられて後世に傳はりました。

文事武藝の總てに於て、悉達太子は第一位を得ましたので、耶輸陀羅女は花輪を

捧げて、太子に上りました。これで自選結婚の式は終はりましたので、太子は彼女と同車で宮中に還御になりました。

九、悉達太子の洪水救濟

ヒマラーヤ山から流れ出て、迦毘羅國の西境を流れるロヒニー河の岸に、高さ七八十丈にも達する巨大なる木が立てをりました。丁度太子が二十二歳になられた年の雨期に、大雨が續きましたので、山奥から流れだす河水が横溢氾濫して、その大樹の根を洗ふたから、その樹は河水中に横に仆れました。それで水が國中に氾濫して、迦毘羅城の附近まで押しよせて参りました。

河の下流地方の明有國は流水が來ないので、水なしで人民は大に困難をしてをりました。さればこれ等の困難を除いて、人民を安穩ならしめるために、悉達太子は釋迦王家の一族の者等と共に、乗馬して彼地に向ひました。

途中或林を通つて行きました所が、一疋の大なる毒蛇が穴から這ひ出して來まし

た。それを見た烏陀夷は

「危険だ」

と叫んで馬より跳び下りざま、劍を抜いて毒蛇を真二つに切りました。毒蛇は苦惱の餘りに毒氣を烏陀夷に吐きかけました。それがためは彼の顔は眞黒になりました。それから世人は彼を黒烏陀夷と呼びました。彼等の一行はロヒニー河岸の大樹の休ふれてゐる處に着きました。

直ちに提婆達多はその大木の根を以て揺り動かしました。次に可難陀は大木を根から擧げて、少しく前に引寄せましたなれども、大に動かすことは出来ませなんだ。

悉達太子は兩手で大樹を擧げて空に投げましたが、墮ちて大巖に當て二つに折れました。その兩斷の一部づゝを兩岸に分置して、汜濫してくる水の口を防ぎましたので、河水は中央を流れて兩岸の洪水は止まりました。

それで人民等は洪水の難を脱れたので、大に歡喜し深く感謝してをりました。歸城の途中多くの觀相家が住んでゐる村を過ぎましたが、彼等は太子の人相を觀て異口同音に皆言ひました。

「この太子さまは今より七年後に出家せられなかつたならば、必ず轉輪聖王となられるであらう」

と近侍の人々に告げました。それを彼等は委細殘らず、大王に報告しましたので、大王は愈々阿私陀仙人の豫言が實現する時の、近づいて來ることを知られまして、大に注意せられました。

一〇、四門出遊

淨飯大王は毎日考へられた。それは悉達太子は最早二十九歳にもなられるにも拘はず、尙ほ毎日學問のみに親んで、世間の愛欲を遠ざけらるゝ傾向あるを見て、何とかして太子をして世間の名利愛欲を喜ぶやうにして、出家の望みを棄てしめたい

と、日夜に心配せられた結果、耶輸陀羅女をお呼びになつて、

「今日よりお前は尚ほ十分に力を盡して、太子の心を慰めるやうに、音楽歌舞などを以て、世間五欲の快樂を喜ぶやうにして呉れよ」

と命ぜられました。耶輸陀羅女は固よりその覺悟でをられたものですから、太子を樂しましめようとて美はしい聲で、謠はれる愛欲微妙の御歌が、太子の御耳には

「あさましや」

時は無常と過ぎ去るを 知らでくるしむ衆生等は

無苦の道をば求めずに 却て無限の苦をもとむ

「おもはんせ」

火宅に住める衆生等を 救はん誓を立てられし

過去の因縁を思はんせ 今こそ時なれ家を出る

と聞えます。果ては蟲音鳥聲は固より山河の流るゝ聲も、清風の枝葉を鳴らす音も、

皆人生の一大問題を解決して一切衆生を根本より救ふべしと、促がす聲とのみ聞えたので、深い思に沈んでをられました。

時に自然に要求せらるゝやうに、太子は林苑觀望を思ひたゝれた。大王の注意深い許可の下に太子は城市の東門より、馬車に乗て出懸けられました。城外に出でますると遙かの途上より、とぼくと老ひ瘦衰て來る者を、太子は熟々御覽になつて、

御者よ あれは何人か 瘦せ憔悴して、

元氣も光澤も 更にない 肉も血も皆枯れはて、

皮膚も筋も骨につき 髮髯白く 齒は落ちて

彼の身に全く 生氣がない 杖にすがつて

蹠踵と 歩んでゐるは 何者ぞ

御「殿下、彼は年が老ひましたので、その身が衰へ精力を失ふて、苦んでをりま

す。多分親族がないので枯木のやうに、この林中に棄てられた者でしやう」
太「年が老ゆると云ふことは、彼の方に起つたことか、誰にでも來ることか」

御「それは勿論長命すれば、老は誰にも來ることと御座ります」

太「それは太變だ、人生一般に老衰と云ふ大問題があるのに安閑として林苑遊びなどは出來ない。早速宮中に車を還へせ」

と仰やつて直に宮中に還へられました。次に太子は城市の南門から林遊に出懸けられました。途上に於て病人に遇ひました。太子は

御者よ あれは何人ぞ 顔色青ざめ眼は窪み

皮膚も荒れはて感じもなく 呼吸の息も苦しげに

手足は戦動き身も震ひ 痛苦は諸處にある如く

苦み叫んで己れが出せし 糞尿の中に居るは誰ぞ

御「あれは病氣のために苦んでをる者で、病氣のためにあんな状態になつたもので

御座ります。

太「かゝる病苦がなくてさへ この世は生活の苦に惱む

それに老苦や病苦あり いかで迂濶に過すべき

と仰やつてその日も亦宮中に還られました。次に太子が西門から林遊に出られるこ

とを、仰せ出された時には、非常に往來の道路を清淨にして、一切不淨の者を道に

止めないことにして、それを嚴重に護りました。然るに太子が西門から御出ましに

なると死人を見られました。

御者よ あれは何者なるぞ 床の上にぞ横はれる

頭に髪なく色青く 頭上に土をふりかけたる

それが周圍の人々は 愁嘆泣哭して胸打てり

かの運ばるゝその人は 何人なるか告げよかし

御「殿下、彼は死んだ者ですから、最早再び彼の父母妻子兄弟親戚朋友を見ること

は出来ませぬ。財産も妻子も皆棄て、彼世に去つた者ですから、親戚などは愁嘆してゐるので御座ります」

太子「かゝる死苦あり愁嘆の 苦痛もありてその上に

世は生活や老病の 苦患もあるにいかにして

世人は怖れず驚かず 學者も諸苦を解脱する

法あたへざる永久に 不變の樂を見いださざる

御者よ車を引返へせ 今は林遊草樂に

暇はあらし吾こそは 諸苦得脱の道を修めん

御者「殿下それは御無理で御座ります。大王陛下より中途で引返してはならぬと云ふ

御命令が御座ります。何卒林宴に御出まし下さるやうに御願ひいたします」

太子「父大王とてこの苦患は脱れ給はぬ……危険じや。早く道を求めねば……サ、直に車を還せ」

と仰やつて宮中に還られました。太子はその後宮中にて沈思黙考してをられました。が、時に花の宴がヒマラーヤ山下の林苑で開くこととなりました。父大王は特に太子をして、花花彌生の歡喜に御意を轉ぜしめようとして、後宮三千の美女を花の如くに飾り立て、花の宴に列せしめました。太子は馬上で北門から出られて、北の方なる林苑に御着になりました。

今度は中途で引返されずに、故障なく林苑に着かれましたので、皆々大喜びで花の宴は歌舞音樂と共に、盛大に開かれました。太子は少頃その席に居られました。が、やがて林中散歩とあつて逍遙せられます中に、静寂なる尼俱盧陀樹の下に行かれますと、そこに一人の沙門が黄色三衣を着け、静に歩んで威儀堂々たる風彩で來られました。太子は彼沙門に向ふて、

「貴方は何人でありますか」

「私は比丘であります」

太「比丘とはどのやうなことをなさるのですか。」

比「比丘はこの世界をすべて無常と見て、生老病死一切の苦患を解脱するために、無漏清淨の道徳を修めて、食を信者に乞ひ清淨の福を彼等に施し、究竟涅槃を得ることを主とする者であります」

太「そのやうな無漏の道徳は何處で修めることが出来ますか」

比「それは父母妻子の繫縛ある家を出で、寂靜なる山林中に入つて修めるのであります」

と云ふてその儘かき消す如くにその姿はなくなりました。それから太子は急に馬を召されて、宮中に御還りになりました。これ等の出來事を侍者の烏陀夷から聞かれた大王は、愈々太子の出家が近づいて來たことを知られて、大に痛心焦慮せられました。

一一、太子出家前の防衛

悉達太子が二十九歳になられた年の四月初めから、宮中に面白からぬ凶徴が現れました。それは庭の樹が枯れて蓮華は開かず、庭の諸鳥は聲を出さない、立琴の糸は自づから切斷して、宮女等は眠ると魔はれ、何をしても喜びの心が起らないなどで、皆心を惱してをられた。ところが同月七日の夜、大王は二つの悪夢を見られ、僑曇彌夫人は八の悪夢を見られ、耶輸陀羅女は十二の悪夢を見られたので、非常に心配せられて、翌八日占夢家に尋ねられた所が、何れの占夢家觀相家も皆、「太子は今日より七日の中に出家せられるであらう。でなければ轉輪聖王となられる」

と云ひましたので、父大王は愈々太子の出家を防止せんとして、親族及び諸大臣を集めて凝議しました結果、城市周囲の防壁を堅固にし、城内出入の門戸は鐵板を以てこれを造り、その一々に大鈴を附けて、開閉に大聲を發せしむる仕掛をした。城の四門は淨飯大王及び彼三弟の王が多く軍隊を卒いて、各々一門づゝを守護

してゐた。城の内部は大臣大將などが、多くの臣下兵卒を率いて防禦してゐるので蟻の匍ひ出す道もない程に、又宮中にては三千の後宮美女をして、音楽歌舞の中に日夜過さしめてゐた。斯のやうに嚴重にして何事もなく六日を過した。七日目の夜太子は謂はれた。

「私が父上に許可を乞はないで出家したならば、父王に對して不孝の罪は免れない。先づ父上の許可を受けよう」

丁度人々が眠に着かうとする時、太子自ら父王の前に行かれて、敬禮して、

「父上さま、私が出家の時が來ました。出家の防禦を御解き下さりませ」と願はれました時に父大王は眼に涙を流して、

「我子よ、ここに居るならば、我等を益するであらう。出家せずにてゐてくれ」

太「私は生老病死一切の苦を解脱するために、出家修道することを御許し下された

51

父「我子よ、我はお前の出家を許すことが出来なう」

太「もしこの事を御許しなくば、私に輪廻の苦を受けないことを與へて下さう」父「それならばお前の思ひ成就するやうにせよ」

と云ふ御許しが出ましたので、太子は父王の御前を退かれて、寢室に御還りになりました。太子は從來耶輸陀羅女を娶られ、夫婦となつてをられましたけれども、清淨行を嚴重に守つて、夫人と性の交りをせられなかつた。そこで太子はお考になりました。もし私がこの儘に出家したならば、世人は私を以て中姓の者として誹謗するであらう。世人をして誹謗する罪を避けしむる爲めに、私は耶輸陀羅女と同衾しよう。このやうに思ひ定められた時、傍の寢床に眠つてをられた夫人は、突然眼を醒して言ひました。

「太子さま。妾は大變な夢を見ました。宮殿の柱は折れまして妾の齒は落ち、日は東より出で、東に入り、貴方は大地を寢床にして、須彌山を枕とし、臍から一

道の光明が出て天空に上つて、暗黒を照破しました。一體これは何の御座りましようか」

太「それは心勞から見たものだ。不安の心を鎮めなさい」

夫「でも貴方は出家あそばされるので御座りましよう。もし御出かけならば何處までも妾を伴れて行つて下さいませ」

と云ふて泣いて頼まりましたので、太子は

「ナニお前のために悪くはせない」

と仰せられて、菩薩の英雄行三昧に入られて、心中一點の汚念なしに、夫人と性交を實行して、一の男子を宿されました。そうして太子は、

「これが婦女子と同衾する最後である」

と謂はれた。耶輸陀羅夫人は何時になき喜びの交りを得て、心を安んぜられたのですやくと眠につき給ふた。

一一、悉達太子の出家

悉達太子は夫人の安眠し給へるを御覽になつて、静に起き上つて、室内を歩み出でられ、多くの宮女の居る別室に入つて見られた。そこには多數の侍女のしだらなく眠れる様は、淺聞しくも汚穢に満ちたる醜狀にて、見るに勝えざる程なれば、一見しても眼を覆ふ程である。或は枯木の如くに手足を投げ出せるあり。或は鼻液唾涎を流せるもあり、平素の美はしき紅顔玉貌は雨に曝された髑髏の如く、尸屍を散亂した墓場の如くに見へた。

秋風に吹きたほされし蓮華池の

枯れし莖にも似たるかな

蓮華の手足もしだらなく

泥のね床によこたはれる

などと感じの儘口吟みながら、厩舎の方へと急がれました。この間の要所々々を護

つてゐる大臣軍將兵士等は、この六日間不眠不休に防衛したる疲勞の出たものか、死んだ者のやうに熟睡してをりました。一つには悉達太子さまが、耶輸陀羅夫人と善く熟睡せられたと云ふ風聞が、一般に傳つて安心したにも依るものでありました。それ故に太子は何の障礙もなく、厩舎にお着きになつて、馬丁の車匿を起されました。

「これ車匿。早く乾陟を引いて来い。我は眞の勝者が住む山林に行くのじや」

と云ふ聲に眼を醒まされた車匿は、夢かとはばかり驚いて、起き上りさまに敬禮して、

「只今は夜深で御出遊の時ではありませぬ。又強敵が攻めよせたと申す譯でも御座りませぬ馬を奉ることは出来ませぬ」

太「車匿早くせよ。煩惱の大敵が吾人を襲ふて来てゐるのじや。サー早く馬を引いて来」

チャ「何んと仰せられても大王の勅命で御座ります。馬を引出すことは出来ませぬ」

太「よし然らば我自ら取り出す」

と仰やつて、馬坊へ自ら御越になられました。車匿は驚いて大いなる聲で、他の人々に知らさうとして、

「太子さまは今馬に乗つてお出懸になります」

と非常な大聲で叫んだのでありますが、不思議に聲が噎れて少しも出でません、兎角する中に太子は自ら馬王乾陟を引いて静々と御出になりましたので、車匿は我を忘れて馬の手綱を取りますと、太子はひらりと馬に乗られて、

「我につゞけ」

と仰せられて宮城大門の方へと進まれましたが、不思議な事には綺羅星の如くに輝いて羅列してゐる、大王を始め大將大臣軍卒等も皆起立の儘、深い眠に落ちてをりましたので、その前をカポカポと蹄の音たてゝ走らるゝに、たれ一人として氣づく者はありませんでした。大門に就いて太子が一度門戸に手を觸れられますと、さ

しも堅固に鎖した門戸も容易く開きました。大聲を發する筈の大鈴も少しも音聲を發しませぬ。これ等の事は皆佛法を外護する梵天、帝釋、四天王などの働であつたと傳へてをります。何れにしても志の存する所は巖根も徹すと云ひまするが、太子が立志の堅固なるや、幾重の防衛門戸を打破つて、愈々城市の東大門の外に立たれました時、馬を後方に向け、城門に對して遙かに父大王等に敬禮して、

「父大王さま姨母君さま。只今まで限りなき恩愛を以て養育下された大恩は深謝いたします。只今より眞實報恩の無爲道に入ります。今より後生死一切の苦患を、解脱する大道を成就いたすまでは、假令ひ枯骨となるも還て父大王始め總ての親戚に見へませぬ、

と斷然と誓願を言ひ終つて、馬を東に向けて雲を分け霞を蹴つて進まれました。これが悉達太子廿九歳の四月十五日の未明以前でありました。千里名馬の乾陟は、一世一代の勢力を出して走りましたので、馬窟國、英雄國、迷寧耶國等を過ぎ、適意

河を跳起へて、八十四哩を経てその大河の左岸にある、三結髮塔に着かれました。太子はそこで馬から下りて、馬の頭を撫で給ひて、

「そなたは今日まで善く事へて呉れた。殊に今日の疾走は大儀であつた」

と更に車匿を顧みて、髻中の寶珠を取出し、自ら劍を抜いて髻髪を根より切斷せられて空に投げられ、その寶珠とその劍とを車匿に渡されて、

「お前はこれから乾陟を引いて宮中に立ち歸つて、父大王にこの寶珠と劍とを遺品として上つて呉れよ」

と仰せられて、傍に置かれた寶冠を取り、又頸に掛けられた瓔珞を自ら解かれて、その二品を亦車匿に渡されて、

「この寶冠は姨母君憍曇彌夫人に、この瓔珞は耶輸陀羅女にそれ／＼遺品として與へて呉れよ」

と仰せられました。それを聞くと車匿は大に聲を揚げて泣いて言ひました。

「どうしてそんなことが出来ましやう。これまで賑やかな宮中で、父上姨母君御夫人を始め、三千の後宮にかしづかれた御身を唯だ一人この淋しい山林中に遺して行く事が出来ましやうぞ。何とぞ私を何處までも御伴れ下されたらう御願ひいたします」

太子「これこれ車匿よ誰人も 生れる時は唯だ一人

死に行く時も一人にて 苦む時も一人なる

浮世を渡る旅行には 一人の外に友あらし

解脱の道を友とする 我には浮世の友いらじ

と仰せられて、強く車匿に歸ることを命ぜられたので、彼は泣く泣くそれ等の遺品を馬の背に縛りつけて、太子が心強くも山林へ奥深く行かると後を見送りながら、泣きくづれて地に仆れました。名馬乾陟まで眼より涙を流し膝を折つて、嘶きました。

「チヤ」オーお前までこんなに悲しいのに、太子さまは何を求めて山深く入られますか……嗟呼かなしい……」

と云ふて太子さまの影が見えなくなるまで、歎いてをりましたが、今は太子も居られず、歎いても果てしがないので、泣きつゝ乾陟を引いて宮中に歸つて行きました。行く時は四時ばかりで着きました。路程が、歸路は疲労も甚しいのと悲歎の心で、とぼくと歩みましたので、翌日の夕方に宮中に着きました。

宮中では太子が出られた朝になつて、太子が宮中に居られないことが解つて、上を下への大騒動となりました。太子の後を追はせるために、四方に人を派しました。更に行方が知れませんが、翌日の夕方になつて車匿が馬を引いて歸つて、その遺品を大王姨母及び夫人にまで上りまして、その経過を一々申上げました。この報告を御聞きになつた大王は歎息して命ぜられました。

「今度の出来事は全く人間業ではないから、太子が出られたからとて、誰人も答

めることは出来ない」

二三、太子の求善知識

三結髮塔から林中に入られた太子は、自らの衣服はカーシカの薄布で非常に立派である。けれども太子の用服であつて修行者の服でないから、行者相當の服を得たと思はれた時も、前の方から行者服を着けた獵師が出て来た。太子は云はれた。「これ獵師どの。そなたが着てゐる行者服と、この私の衣服と交換してくれないか」

獵「それは至極結構ですが、早速換へやせう」と云ふて、直に法衣を脱いで太子に上つた。太子は大に喜んで早速交換して、その法衣を着けられました。

それから太子はヒマラーヤ山下の沙羅大林に住んでゐる跋伽（棄惡）仙人の住處を尋ねました。こゝは適意河がヒマラーヤの山奥から流出して来る左岸で、河を隔

て、連山の遙かなる上に、雄大なる雪峯が巍然と聳へてゐるのを、前にした婆羅の花の無模村中である。そこに居る仙人等は幾日間か限定して、斷食する者もあれば草や木葉や花果のみを食ふ者もある。或は河中に入つてゐる者もあれば、裸體で灰を身に塗つて、塵土に臥してゐる者もある。彼等はこの類の苦行を以て、天に生れる唯一の方法であると主張して修めてゐる。太子は彼等の教師に尋ねて言ふた。

「このやうな諸の苦行は何のために修められるか」

跋「天に生れるためであります」

太「天に生れて何を得やうとするのですか」

跋「永久不變の樂を得んとするのであります」

太「何れの天國も皆壽命に限りがあります。天壽終れば復び苦の身を受けねばなりませぬ。それを如何にせられますか」

跋「そこまでは考へないから解りませぬ。唯だ苦行するのみであります」

太子はそれを聞いて、かゝる苦行は畢竟苦を増すのみで、一切の苦を解脱する道でないとは知られた。一夜そこに宿られて翌朝それ等の仙人から、花と果物との供養を受けられて、そこを出立して南の方吠舍離國に向はれました。

この國には迦羅々仙人の子で、阿羅々仙人と云ふ大學者が居りました。彼は三百人の弟子と共に梵行を修めてをりまして、印度國中にその名聲甚だ大なるものがありました。太子は彼仙人の許を尋ねて、彼の深密としてゐる無所有處の秘傳を受けました。太子は直ちにその奥儀に通達して、その定を得ましたが究竟の解脱でないこと知りまして、その事を彼仙人に告げますと、彼は驚いて云ひました。

「それから上の事は私には解りませぬ。今後貴方が發見せられたならば、私に教へて下さい、今より願ひおきます」

それで太子さまはそこを辭しまして、恒河を渡つて南の方摩揭陀國の王舍城へ行かれました。當時王舍城は印度文化の中心地と尊ばれる程に、進歩した土地であり

まして、又印度文化の特徴を表す山の文明王都で、周圍が群山に繞らされて五山城とも名づけられました。随つて當時有名なる仙人や苦行者や學者や事火婆羅門などは、皆この王舍城周圍の群山中に集つてをりました。

この國の王は印度で最も有力なる大王で、その名を頻毘沙羅と申しました。その頃臣下人民等が、非常な大徳の沙門が來たと云ふて騒いでをるのを聞かれて、

王「それは不思議だ。或は北方迦毘羅國の悉達太子であるかも知れない。一應微行して親しく遇ふて見よう」

と言はれて、太子が托鉢に出られる時を計つて、道で遇はれて見ると、威儀堂々たる風彩は尋常の行者でないと感得せられて、太子の前に進んで敬禮して云はれた。

王「貴方は何れより來られましたか」

太「北方より參りました」

王「北方は迦毘羅國淨飯大王の悉達太子さまでは御座らぬか」

太「いかにも左様で御座る」

王「然らばそのやうな出家乞食の行き止めて復び王國を治めて後出家せられては云何が御座る。我は此國の王頻毘沙羅で御座る。王國統御せらるゝならば君に我王國の半分を献上致すであらう。云何が御座る！」

太「一旦吐き出したものを復び食ひませぬわが意志は」

大塊巍然として虚空に聳へたる

ヒマラーヤ雪峯の山の根が

大風のために揺動とも 解脱にすゝむ我こゝろ

名利の風の力にて 動かされんやは大王よ

と仰せられて、この至大の贈物を斷然御断はりになりました。そこで頻毘沙羅王はその意志の堅固なのに感心して 太子は必ずその道を成就せられるであらうと思ふて。「太子様。然らば貴方が成道せられました曉には、その道で私を導いて下さる

(舊王舎城の遺跡)



(王舎城遺跡山)

様に、今より願ひおきまする」

その後太子は事火婆羅門に就いて、道を尋ねられました。

火は神聖であり清浄である。これに事ふる者は生天を得ると云ふ主張でありました。本來無常物の火が生天を得せしむることは出来ない。假りにそれは可能としても天國は解脱の處ではないと知られて、そこも辭せられました。

その頃五山内に鬪頭、藍、弗と云ふ印度最高の仙人が居つた。太子は彼仙人の最奥義である非想非非想處の密義を聞いて、その深義に達しその定をも證せられてから、太子はそれの不完全なことを知られて仙人に云ひました。

「非想非非想處には尙ほ、我と云ふ無明の觀念があります。この我が復び苦痛を起す種とはなりませぬか」

仙「それは或は苦因となるかも知れぬ」

太「それでは一切苦から確實に解脱した事とはならないではありませぬか」

仙「それはさうだが私には、これ以上の究竟は見出せぬ。もし貴方が根本解脱を得られたならば私に示して下さい」

と云はれた。それで太子はそこをも辭しました。それから太子は考へられた。總ての學者や最上仙人と云はるゝ者等も、未だ一切苦患の眞實解脱を得てゐないのである。されば今後は獨立して修行しよう。それには五山城を去るが好いと思はれて、尼連禪那河の西岸鵞躄羅村の苦行林中に着かれた。こゝで一人で修行して自覺しやうと決心せられました。

一四、六年苦行

尼連禪那河は南方の東部頻提耶山脈より流れ出して、北方に流れて大河と合して恒河に濺ぐ有名な河である。苦行林はその河の西岸に在つて、河を隔てゝ東北方に前正覺山、象頭山などが近く聳へて、河岸や山原には點々として椰子や多羅の木が清楚なる姿を現はして、風景絶佳雄大清淨の境地であつて、今の佛陀伽耶の南方約

一哩の地にある。この地を選んで悉達太子が苦行を實修せられたことは、心境相應の妙地と觀察せられたものであらう。

太子が王舍城に居られて、一人で托鉢修行してゐると云ふ風説が、迦毘羅衛城に傳はりましたので、淨飯大王より三百人の侍者と、憍曇彌夫人より二百人の侍者とを、太子に送られました。この五百人の侍者等が王舍城に着いた時には、太子は既に尼連禪那河の苦行林に行つてをられたので、その後を追ふて彼等は苦行林に着きました。

太子はこのやうに多くの侍者を卒いて修行することは、道に相應しないから此中、道心堅固な者五人を留め、他は皆歸國せしめようと考へられて、その通りに實行せられました。その五人と云ふのは、父王の送つた阿若憍陳如と馬勝と婆師波との三人で、姨母夫人の送つた大名と跋提梨迦の二人とでありました。これ等の五人も苦行しつゝ太子に事へたので、當時太子の五仙人として名高い人となりました。

この時代の一般印度人は宗教上苦行を以て、最も尊いこととしてをりました。尤も順世外道と云ふやうな唯物主義で、享樂を最上として五欲の快樂のためには、道徳でも何でも犠牲とする主義者もありました。併し全體から云ひますと、烈しい苦行者ほど尊びまして、それを供養する人も俱に天國に生れると云ふ信仰でありました。それですから云何に眞理を説きましても、苦行が伴はなければ信用せられなかつたのであります。

この點からお釋迦さまも、烈しい苦行の實修を、一般に示して見せる必要がありましたので、激烈なる苦行を約六年も實行せられたのであります。その苦行は毎日一粒の麻の實と一粒の米とを食するのみで、後には絶食せられた。このやうにして六年を過されたのであります。この苦行に依て苦行を尊む幾百千萬の外道の仙人教師等を感化して、菩提に縁を結ばしめることが出来ました。

又或時太子は一意専心不動にして遍滿虚空三昧に入られた時、平素の飢渴か一時

に迫つて、昏睡状態となつて倒れました。これを見た天人等は

「沙門憍多摩は死んだ」

と云ふて、これを淨飯大王に告げた。大王は太子の超絶的人格を信じてゐたので、

「吾子は佛陀となるのであるから死ぬことはない」

天「佛陀と成ることが出来ないで苦行處で死んだ」

王「我はそれを信ずることは出来ない。吾子は佛陀とならずに死ぬことはないから

である」

と云ふて信じなかつた。これは大王は吾子の超人格な點と、阿私陀仙人の豫言とを、堅く信じてをられたからであつた。太子は時を経て意識を恢復したので、天人等は淨飯大王の許に報告した。

「大王よ貴方の太子は健在であらせられる」

このやうに六年の間苦行を續けられましたので、仙人仲間では「苦行の王仙人」と

云ふ大名譽で呼ばるゝこととなりました。併しながら苦行は極端の行爲であつて、樂行を主とすることと、同一極端の弊害に陥ると云ふことを、觀破せられました。それから太子は苦でもない樂でもない中道を實修するために、適當なる食を得やうとせられて、始めにはハリヌカの實を食せられたので、體力次第に恢復して、美相となつたので美相沙門と呼ばれた。

四月八日の朝宿緣深い村の一少女で、善生女と云ふ者が一千疋の牛より搾つた乳で、次第に精製して得た所の乳で、乳粥を作つて樹神に上る目的で樹下に來た所が太子を見たので樹神と思ふて、その乳粥を前に供へて願ひました。

迦毘羅衛城の淨飯大王の太子は、轉輪聖王となられると承はりました。彼方が轉輪聖王となられたならば、妾を彼方の妻妾として下さるやうに御願ひ申します。

太「淨飯大王の太子は既に出家して解脱の道を修めてをられる。轉輪聖王となられないから、お前の願ひは捨るが好い」

娘「それでは致しかたがありませんから諦らめます」

と云ふてその乳粥を上りました。太子はそれを受けられてから、先づ尼連禪那河に入つて沐浴せられ、糞掃衣を着け、草苴の上つた吉祥草を座としてその上に坐せられ、次で乳粥を食し上られました。それで太子の相好が今まで苦行のために隠れてゐたものが、威光赫耀として輝きました。ところがこれを見て驚いた者は、五人の侍者でありました。阿若憍陳如は涙を流して申しました。

「貴方はなんと云ふ亂暴なことをなされますか。一麻一米果ては斷食の六年苦行を、乳粥と云ふ美食に迷はされて、無殘にも蹂躪せらるゝとは……」

「六年苦行で折角得られた苦行王仙人の名聲も、一旦の食欲のために破らるゝとは、惜しいとは思はれませぬか。どうぞ元の如くに斷食苦行を續けて下さり。」

太「私は名譽のために斷食は致さぬ。解脱の爲に苦行はしたけれども、苦行は解脱

の道でない^{みち}と知つたので、それを止めたまでだ

と聞いた五人は總立ちとなつて、怒りながらに云ひました。

「何んと言はるゝ。苦行は解脱の道でない……それは墮落者の言草です。吾等

はかゝる墮落仙人の侍者となることは出来ぬ。さうだ一同聖地ベナレスに行か

う。」

と五人は遺憾忿滿に勝へない情態で、苦行林を棄て、彼方に向ふて去りました。

一五、降魔と成道

現今傳へてゐる諸佛典に、鉢羅芨菩提祇利即ち前正覺山となつてをりまする山

は、古昔は華果有巖窟と名づけました處で、苦行林より東に尼連禪那河と摩訶河と

を渡つて、北少しく東に行くこと三哩の地にある小山であります。そこに内容の稍

や廣い巖窟があります。そこへ太子が御越しになつて一寸坐られました。するとそ

の窟が震動いたしました。その巖窟の主神が驚いて言ひました。



（正覺山前、河那禪連尼）



（じ望を山麓正前へて隔名河那羅連尼）
その人まふかうやしんせ だんはあやせつらー

「こゝは正覺を成ぜられる所ではありませぬ。こゝより西南尼連禪那河を渡つてその西岸に金剛寶座が御座ります。そこが三世諸佛の成道地でありますから、彼聖地に到られんことを御願ひいたします」

太子も亦さうであつたと知られて、彼地の畢波羅樹下に向はれました。

太子は菩提樹の下にある菩提道場金剛寶座に着かれて、草を敷いて坐せようと考へられた時、そこに一人の草刈が刈つた吉祥草を負ふて來た者があつた。太子は直に彼に對して言はれた。

草刈人よすみやかに 我に與へよ吉祥草

今日こそ我にこの草は 大なる用をなすと知れ

五蘊や病や死などと 俱に住する大魔王を

降伏なして上妙の 寂滅菩提を成就せん

と仰せられたので、草刈人は大に喜んで青く美はしく柔き吉祥草一抱へ差上げまし

た。太子はそれを受けられ、自らそれ等の葉先を内部に向けて、厚薄なく圓く敷座を作られました。

このやうに草座を作つて、その上に結跏趺坐して、東方に向つて明確なる觀念に住して自ら誓はれました。

たとひ我身はこの座上に 朽ちはつるとも骨肉の

破るゝとても生命の 終らんととも一切の

苦患を破る最勝の 無上菩提を成ぜずば

この座を起し動くまじ この座を起し動くまじ

と宣言せられました。これが丁度太子が三十五歳の四月八日の午後でありました。

太子は自ら觀ぜられました。この世界を支配する欲の王である最大權力者は、第

六天即ち他化自在天の主、大魔王である。彼を征伏しなければすべての欲界を制御

することは出来ぬ。精神的安樂世界を立てるには、先づ彼を降伏する必要がある。

そこで太子は眉間の白毫相から、征伏惡魔の大光明を放つて三千大千世界中の惡魔の國土を照しました。その大光明は至る所に大光音を發して、

「釋迦氏の太子は今に成佛して、魔王の國土を征伏するであらう。故に汝等魔王行いて戦へ」

と云ひました。それ故に魔王は千萬億の魔軍を引卒して、太子に對して刀劍の雨を降らし、以て太子をして先づ菩提道場から動かさしめようとした。けれども菩薩はその心地に、金剛不壞の寶鏡を着けてをられるので、魔軍は大勢を以て何程攻撃しても、太子は平常の如くに少しも變りがない。太子は魔軍等を恐怖せしむるために、彼等の口中に一々火事を起さしめたので、彼等は驚き叫んで逃げました。少頃すると何の苦痛もなかつたので、彼等は復び攻撃して來ました。彼等は以前より劇しく刀劍を雨霰の如くに降らして、太子に向つて打ちつけましたが、それ等が太子の近くまで來ると、皆花や花輪と變じて菩提樹を莊嚴いたしました。

魔王はこのやうな太子の威神力を見まして、嫉妬忿怒の心に勝えやらずして、太子の前に来て云ひました。

「貴方は何ぞ菩提道場に坐つてゐるのですか」

太「無上菩提を成ぜんためである」

魔「太子様。私の親切なる言葉を用ひて、王位にお即きなさい。直に轉輪聖王になれます。貴方のやうな小福でどうして佛陀となれましやうぞ」

太「魔王よ、我は三大無量劫に於て、幾千萬億無量の供養を行ひ、一切衆生のために無量の道徳を修めた。それ等を無上菩提に回向したから、將に佛陀となるのである」

魔「そんなに久しい間、無量無邊の道徳を修めたと云ふ證人は何處にあるか。何處にもあるまいアハハハハ」

と大聲で笑ひ叫びました。太子は大悲心を出されて、少しも躊躇する所なく、右手

を擴げて大地を指示して、

我證人はこの大地である

この大地こそ一切の 生ある者の住家にて

動も不動も平等に 乗せて親疎の區別せず

これこそ我身の證人なれ 我にいつはりあらぬかし

さて地の神よこゝに来て 我言證せよ地の神よ

と仰せられて右手を大地に觸れ給ふや否や、大地は震動して大地の女神教妃は、寶莊嚴身を以て百千の大音響と共に、忽然現出して太子を恭しく禮拜して言ひました。

「菩薩さま。菩薩の仰せられた事は、皆眞實で御座ります」

又彼女神は魔王に對して、

「菩薩の云はれたことは皆眞實であつて、妾は活きた證據であります」

と云ふてそこに消失せました。魔王は何も言ふことが出来ないで、心に怒を含んで立て居りました。その時太子は再び大地に觸れますると、その聲が

「魔王等を殺せ」

と云ふ恐しく猛き聲が出ましたので、彼と彼の軍卒等は皆戰慄して、悲しい聲で救ひを求めました。

「大聖人さま何とぞ吾等を救して下さい」

と云ふて逃げんとしました。けれども動くことが出来ないで、大に苦しみました。

太子は一道の救ひの光明を放たれたので、彼等はその住處に歸ることが出来ました。

悪事の苦報に懲りないで、悪い事をそれからそれへと考へ行ふのが、悪魔の自性であります。悪魔王は太子菩薩の威神力を忘れて、太子を悪魔の世界に墮落せしめようと謀りました。そこで今度は魔王の娘である、麗美と愛欲と無比との三天女を太子の處に送つて誘惑しようと謀りました。

かの三美人は天花の如き麗質粹美を以て、男子誘惑の三十二法の秘密を盡して、太子の心を誘惑いたしましたが、更に効果がありません。遂に三女は太子の手を取らんとするまで逼りました時、太子は嚴然として、

「外の容姿は菩薩に似て、内のこゝろは夜叉の如と」

と仰せられたれば、彼三女は白髮皺面憔悴弓腰の老婆と變じ、恐しきまで醜き姿となつて、よぼ／＼したので互ひに顔を見合はして、驚きの餘りに泣きながら、第六天へと逃げ歸りました。

太子菩薩は總ての魔群を降伏し、總ての暗黒を照破して後七日間は、全く安靜に三昧に入られました。

七日を過ぎた四月十五日の朝、明星の出た時に、四諦十二因縁の觀法成就して、その瞬間廓然大悟の智慧に依て、天魔と俱に死魔煩惱魔五陰魔をも根本的に降伏し新に無上完全圓滿の菩提を實證して佛陀となれました。その時お釋迦さまの發せ

られた御言葉に、

「嗟呼、奇なる哉奇なる哉。一切衆生は悉く皆佛性を有することを。されば一切衆生は皆これ我子である」

と仰せられた。この御言葉は歴史あつて以來、世界に表はされた言語の中で、これ以上の偉大の言葉はないのであります。その次第は從來人間は精神的に獨立は出来てゐなかつた。喜んで神の奴隷となつてゐた者だ。彼等の祈願の言葉にも、

「嗟呼救ひの神さまよ、あなたさまの怒りを和けて、我罪を宥し以て貴方の下僕となしたまへ」

とか或は、

「オー神さま。この犠牲を貴方に差上げますから、私のこの病氣を癒して下さい」とか云ふやうな神に救援を請ふと云ふ奴隷的根性のみであつた。吾に佛性あれば成佛して、神をも化導すると云ふやうな大膽極まる精神的獨立は、釋迦牟尼佛が世に

出られるまでは、全くなかつたことでありました。こゝに釋迦さまが世に出られて、世界に初めて人間の心的自由即ち精神的獨立を見る事が出来たのであつて、眞の光明が永遠の心界暗黒を照破せられたものであります。

この世界に於ける精神的最大の出來事は、お釋迦様が三十五歳の時で、今より二千四百五十四年古昔の四月十五日に起つたことであります。この日は實に天地清明、氣候平和で一切衆生自づから、和氣霽々の悦樂を受けて、國に戦争なく民に鬭争なく、自然にお釋迦さまの成道せられたことを、大規模に祝賀の意を表はしてゐた。又十方の虚空に満ちた諸天善神や一切の菩薩等は、お釋迦さまが佛になられたことを心から喜んで、恭敬讚歎の歌をうたふた。

修福の結果福を得て、一切衆生の苦患を救はれた
修福の人は何時にても すべての願望を得らるゝぞ

惡魔の王を降伏し 無上菩提を頓に得て

摩訶涅槃那の寂滅の 不壞の樂をば得給ふた

一六、最初の信者

お釋迦さまが佛になられてから、最初の七日間は菩提樹に對してその恩を觀せられた。第二の七日間は廣く遠い世界を觀ぜられ、第三の七日間は又菩提樹を觀じて安座し、第四の七日間は四天下の東西の大海まで遊觀せられ、第五の七日間は目真隣陀龍王の住處に止り、第六の七日間は榕樹下で禪定に入られ、第七の七日間は龍行樹林に入つて禪坐せられた。その附近に商隊長の黃瓜と賢者の二人が來て、お釋迦さまに牛乳、蜂蜜、砂糖、果物などを供養して、歸依二寶を授つて法を聞いて喜びました。お釋迦は彼等二人は將來道を成ずると云ふ豫言を與へられました。この二人はお釋迦さまの一番最初の弟子でありました。

お釋迦さまが如來となられた日に、迦毘羅衛城に於て耶輸陀羅夫人が、玉の如き

男子を分娩いたしました。然るに淨飯大王は太子が宮中を出られてから、滿六年の後に生れましたので、太子の子でないと言はれました。そこで夫人は非常に歎かれまして、その赤子を庭内の大池の處に伴れて行きまして、大きな石をその赤子に縛りつけて云ひました。

「もしお前が悉達太子さまの實子でないならば、この石と共に池の底に沈みなさい。實子なればこの石もろともに彼岸に渡りなさい」

と云ふ言葉と共に、池水中へ投げ入れましたが、不思議にもその子は彼岸につきましたので、大王始め皆の者が太子の子であると信じました。この子が生れた時月蝕がありましたので羅睺羅（覆障）と名づけられました。後に佛陀十大弟子の一人、密行第一の尊者となられた方があります。

世尊は龍行樹下に在て思はれましたことは、我得た所の法は甚深微妙にして幽光照徹、漏なく集なき無漏甘露の妙法である。これを説明しても他の一切衆生等は、

了解することが出来ないであらう。故に何も説かないでこの儘、林の奥か山深くに住んで、無事に過ごすこととするであらう。と、このやうに考へられた時、これを精神界の問題として、世界の主と仰がれた大梵天王が、お釋迦さまの前に現はれて、「何卒闇黒に苦んで居る一切衆生のために、正覺の光明を與へる法を御説き下さるやうに御願いたします」と請願いたしました。お釋迦様は黙つて御許しになりました。このやうに願ひますることを、勸請説法として非常に功德の多いことでもあります。

それからお釋迦さまは、初めに誰に説法してやらうかと云ふことを考へられました。嘗て成道したならば教示して呉れと頼んでゐた、阿羅々仙人や鶻頭藍弗仙人に説かう。彼等は今何處に居るかと天眼で見られますると、彼等兩人は既に死去してゐた。されば先づ我に久しく事へた阿若、憍陳如などの五人に説いてやらうと思はれました。

當時五人の者は婆羅痾斯（ベナレス）國に居た。古來婆羅痾斯國は多くの仙人賢者の住する所であつて、印度に於ける宗教的首府である。お釋迦様が初めて妙法を宣揚せられる地としては、誠に適當の處であつた。お釋迦様御自身でもそのやうに説いてをられた。

一七、最初の説法（初轉法輪）

お釋迦様は龍行樹林を出られまして、西北の方婆羅痾斯國へ行くために、伽耶山を経て西北に進んで恒河に着いて、渡船で渡らうとせられた所、船頭は船賃を請求して渡なさいので、お釋迦さまは恒河の水の上を地を歩むやうに、さつさと歩んで御渡りになりました。それを見た船頭は非常に後悔いたしました。其後その事が頻毘沙羅王に知れましたので、王は比丘出家から渡し錢を取ることを禁じられました。それからお釋迦さまは婆羅痾斯市に着いて、五弟子の居る鹿野苑に行かれました。阿若憍陳如等の五人は、遙にお釋迦さまの來られるのを見て互ひに言ひました。

「沙門憍多摩は大食して苦行の嚴禁を破つて墮落した者だ。それがこの方へ向つて出て来る。もし來たならば吾等は彼と談話をしてはならぬ。起立し禮拜してはならぬ。彼に敷物を與へてはならぬ」

と相互に制禁の約束をしました。ところへ御釋迦さまは固より三十二相八十種好の大人相を、有つて居られる其上に佛陀となられたので、萬徳圓滿威儀堂堂、赫赫耀々として御越しになつたので、五人の者は皆一様に前の制禁約束を忘れて、我れ知らず忽ち起ち上つて禮拜しました。

「阿若憍陳如是敬んでお釋迦様に侍立し、」

「馬 勝は迎へて上法衣と鐵鉢とを受け」

「婆師波は丁寧に敷物を布き」

「大名は踏臺を下に置き」

「大 賢は早速水を汲んで、御足を洗ひ上つた。」

次でお釋迦様は立てをられると、彼等は、皆御挨拶を申しあげた。

「長老喬多摩。善く御越し下されました。先づこの座に御着き下さるやうに、御願ひ申します。」

時に如來は座に着かれて、仰せられた。

「お前等は如來に對して、そのやうな名で呼んではならぬ。我は如來となつて釋迦牟尼佛となつたものであるから、如來とか世尊などの名で呼ばねばならぬ」

彼等五人は驚いて尋ねました。

「貴方はあの六年間の酷烈なる苦行に依ても、成佛が出来ませなんだのに、どうしてあのやうな修行で正覺を得られましたか」

と云ひました、その時お釋迦さまは、

「出家の法は二つの極端を離ねばならぬ。極端なる苦行は極端なる樂行と同じく正覺を得るに共に障礙となるものである。この二つの邊見を離れて中道に依て道

を修めねばならぬ。中道とは八正道のことである。
と説かれました。こゝで五人は釈迦様の弟子となりまして、お釈迦様に御願ひし
ました。

「何卒世尊の得られましたる中道の正法を、御教示下されますやうに御願ひ申
上げます」

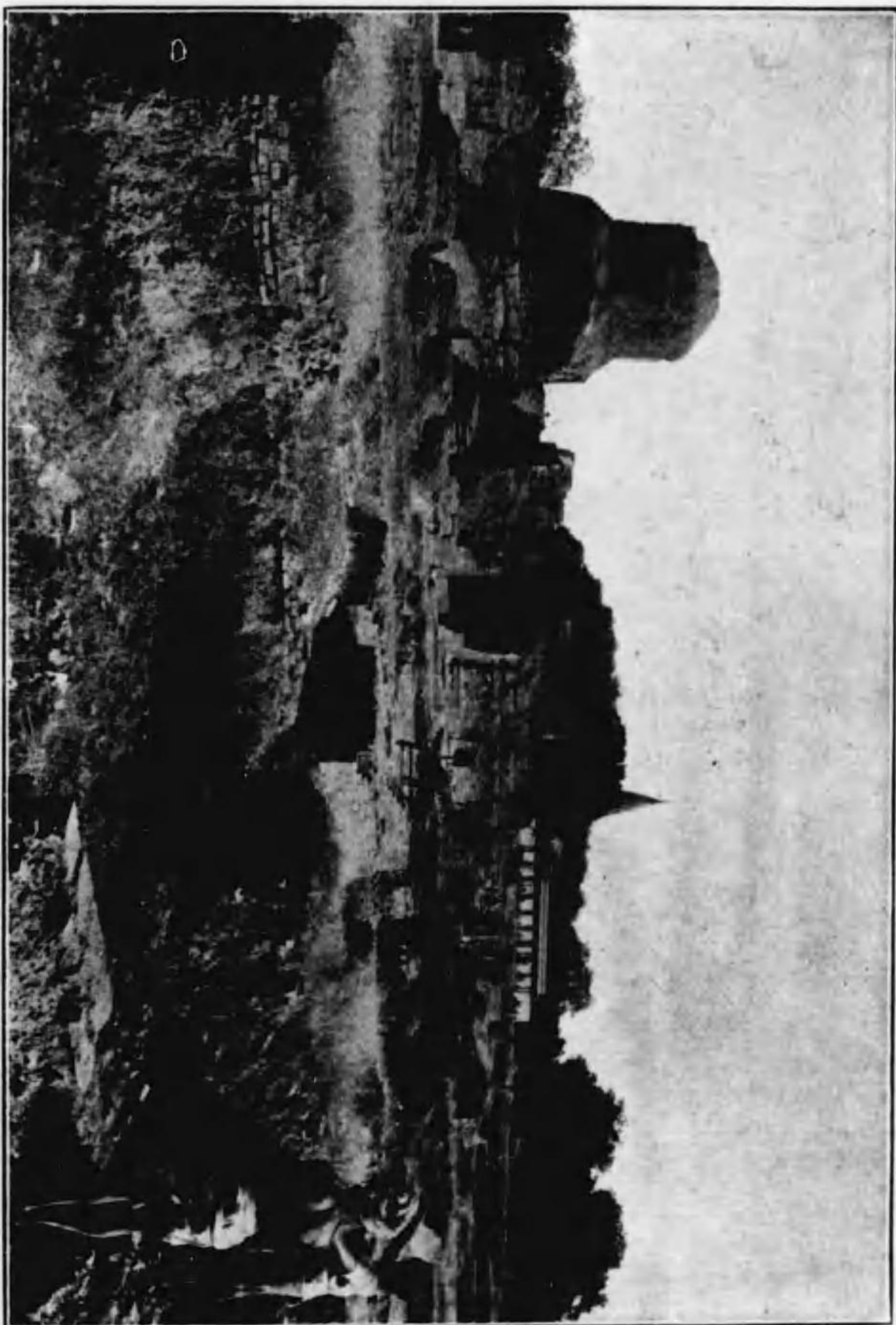
と請はれましたので、お釈迦さまは最初の轉法輪處は、鹿野苑中何處が最も適當の
地であるかを、觀察せられました處、今居る處より數丁東北に隔つた處が、過去の
諸佛の說法せられた處であると知られて、そこにお移りになつて座に着かれました。
時に五比丘は禮拜して一方に列坐いたしました。如來は御身から大慈大悲の光明
を放たれた。その光明から聲がออกมาして、一切の耳ある者に聞えました。その聲に、

無量劫の修行經て

成道せられしみ佛の

正法聞かんと願ふ者は

今こそ時なれいざ來たれ



〔跡道の苑野地地の輪法轉初〕

と宣揚せられましたので、天神、人間、夜叉、乾達婆などの八部衆に至るまで、皆知つて集りました。千萬無数の菩薩たちも、集りまして皆一同に、

「一切衆生を利益するために、正法を御説き下さる様に御願ひいたします」と申し上げました。そこで如来は解脱の大道である。四つの實在的眞理を御説きになりました。これは佛教語では四諦と申します。

「第一、苦の實在。一切衆生の實情は苦であります」

「第二、集の實在。苦の因は集の力で無明の念であります」

「第三、滅の實在。無明の滅が一切苦の寂滅であります」

「第四、道の實在。滅に達する道は一正しく見ること二正しく思量すること三正しく語ること四正しく業を行ふこと五正しく精進すること六正しく坐禪すること七正しく記憶し念ひ出すこと八正しく生活すること」

このやうに一度説いて、次にその四諦を完全に知つて禪定に入ります方法と、三度目にはこの四諦は二の邊見を離れて、中道の眞理であることを説かれました。このやうに三度四諦を御説きになつたので十二行法輪と申します。この十二行法輪は誰人も未だ嘗て説いた者が無い尊い正法であります。この四諦から十二分教も出れば、八萬四千の法門即ち一切藏經も出るのであります。

この説法に依りまして、十方虚空の八部衆等は皆聽聞正法の大利益を受けました。中にも特に大利益を受けた者は、五人の比丘でありまして、彼等は阿羅漢果を得ました。それで如來は仰せられました。

「今この世界に比丘僧が五人あつて三寶が完備した。その五人の比丘僧が皆阿羅漢となつたから、私と共に六人の阿羅漢が存在してゐる」

と仰せられた。これが比丘僧の初めであつて、又佛と法と僧との三寶が、初めて世に存在することゝなつたのであります。現今でもこの鹿野苑には、無憂王が建てた

初轉法輪の記念塔や石柱碑文があります。

この五人は出家僧侶で阿羅漢を得た最初の弟子であります。尚ほ在家大衆で阿羅漢を得た最初の五人があります。彼等は阿尸婆河の岸に住んでゐる在家の子息であつた。その名は、詰底、維摩羅、富樓那、瞿波底、跋陀羅波賦、と云ふた。或日彼等五人は鹿野苑の附近で、藝妓を率れて林遊會を催ふして戯れてゐました。彼女等は醉興の餘りに裸體となつて女根露出し、狂態亂狀遂に墓地に在るの感に打たれた詰底は、これを厭ふて林中を吟行しました。深く考へて歩行してゐる中に、お釋迦の前に出ました。彼はつらく、如來を觀てをりましたが、あまりの尊さに打たれて敬しく禮拜して、

「どうかこの私にあなたさまの尊い法を御授け下さる」と願ひました。そこでお釋迦さまは、

四諦十二行の法輪を御示しになりました。それで彼は在俗の儘で阿羅漢果を得ま

した。他の四人も亦説法を聞きまして、遂に阿羅漢果を得ました。彼五人は最初の阿羅漢となつた優婆塞迦で即ち修徳士と名づけれます。彼等の母や妻も優婆私迦即ち修徳女となりました。これで四衆即ち比丘、比丘尼、優婆塞迦、優婆私迦の中で、比丘尼を除いて他の三衆は具備しました。

曲女國から迦旃延子等の五百人が來まして、佛の説法に依て皆阿羅漢果を得ましたので、お釋迦様は彼等をして他國人を教化せしめたるめに、諸國にお遣はしになりました。

一八、三大行者の教化と頻毘沙羅王

お釋迦さまは成道第一年の雨期安居を、鹿野苑で婆羅痾斯の長者徳賢が建て、供施した、精舎内で過されましたが、その間にワラナシーだけで、六十七人の阿羅漢果を得た弟子を得られました。その安居を終つて後お釋迦さまは、王舎城に御出でになる途上、尼連禪那河岸の優樓頻螺迦葉波仙人の所に宿を求められました。

彼は國內の王侯大臣學者等から、阿羅漢であるとして尊敬せられてゐる仙人であつて、五百人の總卷髮の弟子がありました。彼に二人の弟があつて次を那提迦葉波と云ひ、季を伽耶迦葉波と云ふて兩者とも二百五十人宛の弟子を有つてゐた。お釋迦さまが主人に宿を求められますと、彼はお釋迦様を試めすつもりで言ひました。「私の客室は只今毒龍の棲んで居る室より外にありません。それで宜しくば御宿り下さう」

釋「結構です。然らばそれを拜借いたさう」と仰せられて、平氣で大毒龍の室に案内せられて御宿りになりました。眞夜中になりましたると優樓頻螺迦葉波は、例の如く彼の家の屋上に出まして、天象星行を見てをりましたが、餘りに周圍が急に明るくなつて來ましたので、善く見ますとお釋迦さまが宿つて居られる、毒龍室から火焰が盛に出てをりましたので、彼は、「嗟呼可愛そなことをした。彼若い沙門は毒龍の火のために焼き殺されたわい」

と云ふて歎息しました。併し翌朝になると釋迦さまは、彼大蛇を小にして鐵鉢の中へ入れて御示しになりました。

「私はそなたの毒龍を化度した。見なさい。」

と云はれた。そこで彼大行者始め五百の弟子等は、大に驚きました。彼主人の仙人丈はこの若い沙門は神通力あるけれども、併し尙ほ我に比すべき阿羅漢でないと思ひました。その時釋迦さまは、

「そなたは今私の神通力を偉大としながら、尙ほ私を以てそなた自身に比ぶべき阿羅漢でないと思ふてゐる。併しそなたは眞實の阿羅漢ではないのである。なぜならばそなたは四聖道の功德を行ふたこともなければ、不生の覺りも得てゐない。故に阿羅漢ではない。私は永劫の前生に於て、この聖果に達する功德を修めたから、今生に佛果を得たのである。」

と教示せられましたので、彼大行者は驚き怖れて、

「貴きみ佛よ、世尊に隨つて教を受けたいと願ひます」

釋「然らばそなたの五百人の弟子等にもその由を告げよ」

と仰せられたので、彼等は其所由を告げました所、彼等も皆共に御弟子となりたいた願ひました。彼等は皆御弟子となることを許されまして、彼等がこれまで祭つてゐた事火の道具と、自分等の總卷髮の切斷したものを、皆河に流しました。那提迦葉波と伽耶迦葉波は、その下流でそれ等の流れて來るのを見まして、大兄の所に何事が起つたことを知りまして、急いで來て見ますと、大兄は五百人の弟子と共に、お釋迦様の弟子となつてゐるのを見て、喫驚りしましてその所由を尋ねますと、大兄は皆と共に弟子となつた事實を語つて後、

「我等の本師釋迦牟尼如來は、世界中で最上第一の教主であらせられる。されば我を始めとして五百人の者等も、一同に弟子となつた譯である。お前等も皆この古今未曾有の大教師の御弟子となるが好い」

と説かれましたので、那提伽耶の兩人もその弟子五百人と俱に、お釋迦さまに願ふてその弟子となりました。

お釋迦さまは三迦葉波と一千人の弟子とを引率れて、王舎城に向はれました。これはお釋迦様が嘗て王舎城に托鉢の際、頻毘沙羅王に成道の後は、王に説法することを約束せられましたので、行かれたのであります。王舎城から約四里ばかり隔つた杖林苑に、佛が着き給ふた時にその事が王舎城に知れた。王は佛陀の到着を聞いてから、市民に布令を發して、

「明王家の系統である大沙門釋迦牟尼佛陀は、杖林に着き給ふた。彼方は嚴にして愛樂すべき妙法を説き給ふのである」

と告げた。彼王は多くの軍卒を隨れ、貴族大臣婆羅門の群に繞られて杖林苑に赴いた。多くの弟子たちに圍繞せられてゐるお釋迦さまを見て禮拜した。そうしてお釋迦様の傍に三迦葉波が居るので、三迦葉波がお釋迦さまの教師であらうか。お釋迦

様が三迦葉波の教師であらうかと云ふ疑を起した。これは何れであらうかと云ふ疑が、總ての者に起つた。お釋迦さまは總ての心の疑を知られて、兄の迦葉波に對ふて、

「そなたは今何を一番樂いとするか」

迦「世尊佛陀さま、私には只今涅槃の境が最勝の安靜であつて、それを第一の樂みとしてをります」

釋「そなたは何故に祭儀と苦行とを棄てたのか」

迦「世尊佛陀さま、私は世尊の御教に依りまして、祭儀と苦行とを棄てました。世尊は私の最上教師であります」

そこで總ての人々は、三迦葉波はお釋迦の弟子となつて、隨從してゐるのであると云ふ事を知りました。それからお釋迦様は總ての者に對して、四諦の法を説かれました。それで三迦葉波始め一千人の弟子は阿羅漢となりました。大王始め十萬の聽

衆は皆入流の果を得ました。残り一萬の大衆は三寶を信ずる者となりました。大王はカラシタカ鳥の棲んでゐる竹林に、大精舎を建て、お釋迦様に上りましたので、そこを迦蘭陀竹林精舎と名づけて、佛は弟子と共にその精舎に住せられました。

一九、二大弟子と大迦葉波の得度

王舎城の北三里程隔つた那蘭陀村の婆羅門得處の娘に舍利と云ふ娘があつた。彼女は婆羅門提舎と結婚して舍利弗を生んだ。その子は幼にして聰明鋭智で諸學に通じたので、十六歳の時には彼と論議し得る者はない程であつた。彼の親友に目連子と云ふ有力者があつた。彼等二人は或時山の頂に上つて、下の平野を見ると、御祭りで數萬の人々が嬉戯遊樂してゐるのを見て、二人は俱に歎息して言ふた。

「この多數の人々も百年の後には、一人も残る者なく皆死の口に吞まれて絶無となるのである。一方にはこのやうに滅ぶることは決つてゐる。されば他の一方には不滅の實がなくてはならぬ。何處に不滅を教ふる眞の師があらうか。もし我等

の中何れかそのやうな師を發見した時には、互に知らせて俱に弟子となつて學ぶことゝしよう」

と約束しました。彼等二人は二百五十人の弟子を率いて外道の教師で刪舍耶と云ふ人の弟子となりましたが、彼等の求むる所が得られないので失望してをりました。或時舍利弗が王舎城に行きました所が、途中でお釋迦さまの弟子で、馬勝と云ふ比丘に遇ひました。彼比丘の進止態度がいかに寂靜で、自然に規律あつて、柔和端嚴であるのを見て、これは眞の道を修むる者の行相である。誰の道を修むる者であらうか。尋ねて見ようと思ふて、彼比丘に敬禮しまして、

「大比丘よ貴方の容貌は、柔和忍辱と清淨端嚴とを表してゐます。もし貴僧は何方かの弟子であるなれば、何と云ふ方の教を受けてをられまするか」

比「私は世尊釋迦牟尼佛の弟子であります」
舍「世尊はどのやうな教を説かれまするか」

比「私は新參者ですから深くは知りませぬが、唯だその一端だけを述べます」

あらゆる物は因縁から生じます。
如來はその因縁を説きます。

又其因縁の滅盡をも説きます。

これが大沙門の説であります。

舍利弗はこの偈を聞くや否や忽ちに無垢の法眼を得ました。彼は大に喜んで直ちに目連子の所へ知らせに行きました。すると目連子は舍利弗の法悦滿面六根清淨なるを見まして、

「友よ貴方は甘露法を得ましたか」

舎「ハイ得ました。無上の法を得ました」

と云ふて馬勝比丘に遇ふた始末と、その聖偈とを説きました所、目連子も直ちに法眼淨を得まして大に喜びました。二人は刪舍耶師の許に行つて、三度まで暇を請ひ

ましたが許されなかつたので、然らば正法を求むるために邪師を棄てることは、已むことを得ないものとして、自分等の弟子二百五十人を随つて、お釋迦様の處へ参りました。時に世尊は、

「弟子よ來たれ。解脱の道に入れよ」

と仰せられて、直ちに得度せられました。これが如來の弟子中に於て、智慧第一の舍利弗尊者と、神通第一の目連尊者と申して、如來左右の兩脇立となつた方々です。又此二百五十人の比丘と、前の三迦葉波の一千人とで、一千二百五十人となります。大抵の御經の初めに千二百五十人と俱なりきとありますのは、これを云ふたものであります。如來の弟子は實に多數でありまして、千二百五十人と決まつた譯ではありませぬけれども、代表的の數として擧げられたものであります。刪舍耶師は有力なる弟子等を失ふたので、血を吐いて死んだと傳へられます。

お釋迦さまの衣鉢を傳へられた方で、佛教の初祖となられた摩訶迦葉波尊者は、

幼名を榕樹生と言ひ、迦葉波（護光）氏で、佛弟子となつてから偉大なる徳を表はしたので摩訶（大）迦葉波即大迦葉と尊稱せられた方でありませう。彼は王舎城の大富豪であつた婆羅門の家に生れ、幼時から淨行を好んで出離したいと願ふて、學問を勵んでをりました。父母はそれを大に憂へて早く妻を迎へようとした。ところが彼の皮膚の色が闇浮檀金色でありましたから、彼は言ひました。

「私に妻を娶り下さるならば、私と同じ色で徳のある娘を捜して下さう」

とその父母に願ひました。父母は諸方に人を派して、闇浮檀金色で道徳のある娘を捜しましたが、容易に得られなかつた。それでも遂に遠い北方の迦毘羅衛城の婆羅門の娘に跋陀羅と云ふのが、彼の求むる通りの資格ありましたので彼女を娶りました。

併し彼等二人は名ばかりの夫婦でありまして、相互に淨行を護持して、一人が寢れば一人は必ず起きてゐることとして、暮らしてゐました。或時妻の跋陀羅は晝寢

してゐましたが、彼女の手が寢臺の外に出てをりました。その手を毒蛇が噛ふとして狙つてゐました。それを見た榕樹生は靜にその手を取つて寢臺の中へ入れました。すると彼女は直に眼を醒まして云ひました。

「貴方は淨行を護ると云ふ約束であるのに、何故に妾の手を取りましたか」

榕「あの毒蛇を見なさい。そなたの手が寢臺の外に出てゐたのを、噛ふとして狙つてゐたので、寢臺の中へ入れたまです」

と云ひました。それ程までに各自に淨行を護つてゐたのであります。勿論兩人とも出家したいと願ふてゐたのでありますけれども、父母が許さなかつたので十二年の間家に居りました。遂に父母も亡くなりましたので、彼等は少しも惜む所なく、全財産を貧民に施しまして、後に兩人とも家を出まして道を別にして去りました。

その後跋陀羅女は外道の師富樓耶に就いて得度しましたが、長い時を経てから釈迦さまの弟子となつて阿羅漢果を得ました。榕樹生は外道の六師に道を問ひ

ましたが、満足出来ないで、王舎城へ参りまして、お釋迦様に御遇ひいたしますると直に敬禮して、

「世尊よ、如來は私の本師であります。私は世尊の聲聞であります。」

と申し上げました。それをお釋迦様は快く御受けになりました。直に得度せしめられました。次でお釋迦様は五蘊の法を説かれましたので須陀洹果を得ました。第九日目に或弟子の死んだのを見て、阿羅漢果を得ました。十大弟子の一人となつて、頭陀行第一とも、智満足第一とも稱せられました。

二〇、火生長者の得度及び長爪梵志の得度

王舎城中の長者で甚賢と云ふ者が外道の師裸體子を信じてゐました。世尊は彼家の前で食を乞はれた時、彼の妻が供養に出ました。彼女は阿羅漢となる男子を懐胎してをりましたので、世尊は彼女に、

「貴女は男子を産みましよう。その子は出家して阿羅漢となりましよう」

と仰せられました。併し裸體子は嘗て妊娠でないと云ふてゐましたので、夫の甚賢は佛陀の豫言を甚しく厭ひまして、妻に墮胎薬を飲ましましたが何の効もありませぬ。だん／＼と母胎は膨脹してゆきますので、彼は拳手を以て妻の腹部を強く打ちましたけれども、その手は外れて他を打ちました。夜中隣人の知らない間に、彼女を林中に伴れ行き、敷物で顔を覆ふたので彼女は死にました。それからその屍骸を火葬場へ持て行きました。これを聞いた裸體子は揚言して、

「喬多摩の初の豫言は外づれた」

と大に罵りました。丁度その時お釋迦様は微笑せられましたので、弟子たちはお尋ねしました。

「何事が起りまして御座りまするか」

「今私は火葬場へ行くから、法衣を持って來なさい」

と仰やつて法衣をつけて墓地へ行かれました。丁度その時長者の妻の死を見送りの

ために、頻毘娑羅王も侍臣を随れて來合せてをりました。お釋迦さまは長者の妻の屍體が、積薪の上に載せられてゐるのを見て、微笑せられました。裸體子はそれを見て長者を呼んで、

「お前さんの妻は天命を終へて死んだのですか」

長「ハイそうです」

と云ふて屍體下の薪に火を放ちました。枯れてゐる薪が焰々と燃え上りまして、屍體に燃えうつりました時、火焰中に一大蓮華が現はれ、腹部が裂けた處より蓮華中に、玉のやうな男子が生れて産ぶ聲をあげました。時に長者と裸體子は大に赤面して見てをりましたが、世尊は長者に對して、

「彼子を取れ」

と仰せられましたけれども、長者は取りませんでした。世尊は耆婆童子に命じてその子を取らせました。耆婆は少しも躊躇せず直に火中に跳びこんで、その子を取

り出しました。ところがその火は清冷であつたので、易々と子供を火外につれて來て、彼は長者にその子をつきつけて、

「この子供を受取りなむ」

と云ひました。併し裸體子等は長者を制止してその子供を受取らしめなかつた。それゆゑ世尊の命令で、頻毘娑羅王にその子を渡しました。

このやうにこの子供は火の中で生れましたので、お釋迦さまは火生と名をつけられました。後にこの子が生長した時、亡くなつた父の遺産を受けました。それから彼は三寶に歸依しまして、母の殺されました處に精舎を建立して、お釋迦さまに献上いたしました。その精舎は敷座苑と名づけられました。

長爪梵志とは成長して後の字であつて、本名は摩訶拘絺羅（大膝）と云ひます。彼は舍利弗の母の弟でありました。舍利弗が母胎に宿つてから、彼は何時も姉と議論して負けました。彼は考へました。それはこの姉の腹に宿つてゐる子は、容易な

者ではない。今でさへ我は負けるのだから、彼が出生したならば兎ても叶ふ者ではない。今から大に勉強しなければ叔父が甥に敗られると云ふ結果を見るであらう。それから彼は南印度に行つて、爪を切る暇もなく二十幾年間勉強精勵しましたので長爪となつたので、長爪梵志と字せられるやうになつたのであります。彼は總ての學問を終へて郷里に歸りますと、舍利弗は既にお釋迦さまの弟子となつてをりましたので、彼自身も亦お釋迦さまの弟子となつて、遂に阿羅漢果を得ました。

二一、祇園精舎の建立

この祇園精舎は京都の祇園さまではない。印度國舍衛城の祇多園の略名であります。詳名は祇多園、給孤獨精舎と云ふのであります。この舍衛城に施し好きの長者があつて、孤獨の人々に食物を施したので、給孤獨長者とも善施長者とも云はれました。

彼は或時商用のために王舍城へ來まして、友人の長者の宅に宿りました。ところ

がその夜友人の家では、非常に多數の人々が集つて、食物の調理に騒いでゐるので、何事が起つたかと思ふて友人に尋ねました。

「今晚御邸では大へんお忙しいやうでありますか、何事が起りましたか」

友「イヤ誠に騒々しくて御氣の毒に存じます。實は明日正午前にお釋迦さまとその

お弟子等千二百五十人の比丘衆を請待して、晝飯を差上げまする支度をしてをり

ますので御座ります」

給「お釋迦さまとは」

友「迦毘羅國淨飯大王の悉達太子さまが、成佛せられて釋迦牟尼如來とられた方

で御座ります」

と聞いた給孤獨長者は如來の名に、身の毛が悚立つ程に有り難く感じまして、至急に釋迦さまに御遇ひ申たくなりまして、

「今その如來さまは何處に居られまするか。これからお参りしたく願ひまする

が、夜中御遇ひ下さるでしようか」

友「靈鷲山と云ふ深山に居られまするし、夜中は猛虎襲來の怖れもありまするから、明朝にせられたが好しく御座ります。宅の若者に案内いたさせますから……」

給「それはありがたい。宜しく御願ひ申します」

翌日早朝出立して靈鷲山に上り、お釋迦さまに拜謁を得て、御説教を聞いて須陀洹果を得て、非常に喜びました。長者はこのやうな尊い喜びを、我國人にも受けしめたいと願ひまして、

「如來さま。我國人にも世尊の無上甘露の法を受けさせたいと願ひまするから、何卒我國へ御留錫下さることを御願ひいたします」

釋「それは行て宜いが、我弟子等が雨安居のための精舎がなければ、行くことが困難である」

給「それは建立致します。何れの地に何のやうに建てるかを、指示するお弟子の御派遣を御願ひいたします」

そこで舍利弗と目連子とが、舍衛城に行くことを命ぜられました。給孤獨長者は途中の驛場に於て、

「古今無比の大聖人も釋迦さまが、近日御通行になりますから、遊行處即ち寺を建立せよ」

とて資金を與へて命じつゝ行きました。愈々舍衛城に着いた彼等は、市に近からず遠からずして、寂靜清淨なる地が何處に在るか、毎日物色致しました處が、當國王の太子祇多が有つてをる離宮が、最も適當の地であると云ふことに決定しましたので、長者は太子の所に行きまして、太子に對して熱心に申しました。

「私が最も尊信する釋迦牟尼佛と、そのお弟子等の爲に大精舎を建立したいと願ひます。ついでには精舎建立の候補地としては、貴方の離宮より外に適當な處が

御座りませぬ。それ故に是非とも彼地を私に譲渡下さるやうに御願ひ申しませぬ。」

と眞實こめて願ひました。けれども太子は

「あれは賣物でないから賣ることは出来ぬ」

「でも御座りましやうが、この國へ一大聖人を御迎へ申すためでもあり、國民一般の精神向上のためでもあり、尙ほ又國家の幸福安穩のためでもありますから譲つて頂きたい」

とて、太子が断はれば断はるほど、断はることの出来ない理由を述べて懇々と請願いたしました。遂に太子は言ふことがなくなつたので、威嚇してやれと云ふ氣持で言ひました。

「それなら賣つてやる。併し価格は高いぞ。それは彼土地の全面(大約十五町歩)に黄金の板金を布けば、賣つてやる。どうだ買ふか」



〔跡遺の舍精獨孤給國祇城 兼 令〕

給「ありがたう存じます。それで確かに頂戴いたします」と聞いた太子は大に慌て、

「イヤ、あれは戯言じや。賣るのではない」

給「イヤ王者に戯言はありませぬ。確かに手前が譲り受けたに相違御座りませぬ」この評議が遂に宮廷内の裁判所に訴へられました。遂に給孤獨長者の勝訴となりまして、祇園精舎の敷地の譲渡が決定せられました。それから長者は九個の倉庫に積んであつた黄金板を引出して、多くの大象に載せて運ばしめ、日夜多数の人々をして布き詰めさせました。七日七夜にして樹木建物を除いた外の土地には皆布き詰めました。それで長者は太子に對して、

「太子さま。受取つて下さい。それから敷きつめられない樹木や建物のある處は何ういたしまするか」

と尋ねました。太子は實に驚きました。長者の大度量も驚くべきだが、お釋迦さま

の徳は何程廣大であるか、實に謀り知られぬものがあると感心しました。そうして御自身もその徳光を喜び信ずる餘りに、

「イヤ。それは計算に及ばぬ。私から釋尊に御寄附いたさう」

それで苑中の樹林は祇多太子の寄附でありますから、祇多園とも祇苑とも又逝多林とも名づけられ、給孤獨長者が土地を買ふて建た寺でありますから、給孤獨精舎とも名づけられたものであります。その後普請が出来上つたので、お釋迦さま及びその大衆を御迎へして、その大精舎をば長者から釋尊とのお弟子で四方將來の大衆にまで、供施する式が盛大に行はれました。

二三、波斯匿王及び其夫人末利の歸佛

梵語に波斯匿王は我國では「はしのく」王と云ひます。祇多太子の父でありまして、喬薩羅國舍衛城の大王でありました。始めは婆羅門の教を信じてをりまして、お釋迦さまの信者とはならなかつたのです。併し祇園精舎が建てられてから、多く

の人たちがお釋迦さまの弟子となつたり、信者となつたりすることを毎日見聞しませるので、お釋迦さまは眞實佛陀となつたものであらうか、と云ふ疑ひを起しました。或時王自らお釋迦さまの前に行きまして、敬禮して御尋ねいたしました。

世間に多くの人々がありまして、世尊が無上菩提を成就して佛陀となられたと云ふことは、虚構の言であると申します。如何がで御座りましやうか。

釋「私は無上菩提を完全に成就して佛陀となつた者である」

波「彼老熟で博學なる婆羅門の如き、又成就派の行者の如きは、世尊が佛陀となり給ふたことを承認しませぬ。その申す所に依りますると、世尊は生れて長時を経ないで出家し、又長時を経ないで成佛したと云ふことは、あり得ないことだと申します。如何で御座りましやうか」

と申し上げました。そこでお釋迦様は太子の時の英雄行三昧とて、在家菩薩修行の實際を御説明になりましたので、波斯匿王は無二の信心を得て大に歡喜いたしましたし

た。これが釈迦様が三十九歳の時でありまして、波斯匿王は佛法の主旨に基づきまして、國中に盗みをなすな、邪淫を犯すなと云ふ法令を御出しになりました。

釋尊が未だ舍衛城に御越しにならない時分のこと、この舍衛城の耶若多婆羅門の別荘に、頭髮の黄色な女子で黃頭と呼ばれた奴婢が、別荘番の中に雑つて居りました。或日この女子は考へました。妾は幼い時分に眞實の父母に大切に愛せられてゐた。急に父母が亡くなつて伯父に財産を奪はれ、その上奴隸として賣られた。さうして人間中最下等の苦界に置かれてゐる。何とかして普通の人間になりたいものだ、と云ふやうな思ひに耽けりつゝ、門前に参りますと、遙かの彼方から偉大なる御身で、尊い相を具へた大沙門が托鉢に来られるのを見ました。彼女は直ちに彼大沙門に供養したいと思ひまして、速かに臺所に奔て行きまして、

「今日晝食の妾の分を下さいませ」

と云ふて出來上つてゐる御飯やお菜を、清淨な木の葉に受けまして、それを以て大

沙門に供養いたしました。その大沙門は舍衛城につかれて間もない時のお釋迦さまでした。さうしてその奴婢の供養を微笑して受けられました。彼女は自分が晝食をせずして、一飯を大沙門に供養することの出來たことを、非常に満足を感じまして喜びました。

それから少頃時を経て、その國の波斯匿王は狩に出かけまして、鹿を追ふ結果主従離ればなれとなつて、王は一人となつたので、馬上耶若多の別荘につきました。王は馬より下り馬を樹に繋いで、喉の渴を愈やすために、別荘内へ奥深くは入つて行きました。それを見出した黃頭は、固より彼の國王であることは、知る由もありませんが、伶俐な彼女は貴人と知つて、恭しく禮をして

「こちらへ御越し下さい」

と云ふて亭形の蔓舎に導きました。亭に入りますと、彼女は敷物を布きまして、「これへどうか、おつきを……」

王は黙つてその座につきました。

「少頃お待ち遊ばせ」

と申して外庭の池に往て大いなる蓮の葉を取つて、それで水入れを手早く桶のやうに造りました。それに水を汲んで大王の前に持參して、み足を洗ひました。それから中位いの蓮葉を取りまして、前の如くにして水を持參して、王さまの御顔や御身の汗を拭ひとりました。次に小さい美はしい蓮の葉に清冷なる井戸水を一杯汲んで来て、

「御客さま。これを召し遊ばせ」

と云ふて差上げました。王は快く一飲みにして眠いやうな気分をしてをりますると、彼女は自分の上衣を脱ぎまして、それを地上の布物の上に覆ひ、枕をいだし

て、

「これへ御休み遊ばせ」

と申上げました。大王は喜んで横になりました。彼女は椰子葉の大團扇で大王を扇ぎました。大王は好い心持ちでウトウトと眠りかけました。彼女は大王の御身を撫で擦りして足を揉みました。それで大王は熟睡してしまいました。漸時経てから何か噪しいので大王は眼を醒まされすると、大王を捜して參つた臣下軍人等が集つてをりました。黄頭は尙ほ大王の御身を撫でゝゐました。大王は思はれた。この娘は何んと云ふ伶俐であらう。私が何も命じないのに、私の欲する所を悉くしてくれた。自分の傍にこのやうな娘が居たならば、實に結構であると思ふて尋ねました。

「一體お前は誰の娘であるか」

黄「イエ娘では御座りませぬ。この家の奴婢で御座りまする。」

王「然らば何處の生れで父母の名は何と申すか」

黄「父はこゝから北のチャンドラ村の村長でありましたが、今から五年以前に父母ともに亡くなりました。それから伯父が妾を奴婢に賣つたので御座ります」

王「ア、これ〜お前等この別荘の持主耶若多の本宅へ参つて直に彼主人を呼んで参れ」

と命ぜられますると、數名の軍卒は直に乗馬して、舍衛城へ行きまして、婆羅門に大王の命を傳へますると、彼は喫驚して急いで別荘の大王の許に参りまして、

「大王陛下、別荘の留主番が何か不都合なことでも、仕でかしたのでは御座りませぬか」

「イヤさうでない。この少女はお前の奴婢か」

「ハイさよう御座ります」

「これは私に欲しいのだが、何程の價をとらするか」

「陛下に差上げまする價は入りませぬ」

「イヤ只貰ふわけには参らぬ。價を申せ」

「然らば求めました金三百兩を頂戴いたします」

大王は侍者を顧みて、

「これ侍者、お前宮中へ急行して金三百兩とこの少女に着ける衣服裝飾品等を馬車と俱に持ち参れ」

と命ぜられました。少頃にしてそれ等の物は調ひましたので、金は長者に渡し、衣服等は黄頭に着けしめた處、非常に立派に威ある貴女のやうになりました。黄頭は夢かとはかり喜んで居りますると、大王は馬車に乗られそれに同車を命ぜられまして、大王と共に宮中に着きました。

黄頭は末利苑から得られたのだから、末利と名づけられました。惻愍な彼女は貴婦人となるに必要なる音楽歌舞を始め禮儀書數等に至るまで、少頃の間に上達いたしました。大王は末利の才と徳とを非常に愛せられまして、遂に彼女を立て、第一夫人とせられて五百の侍女を興へられた。

或日末利夫人は徒然の餘りに、自分の身分について考へました。自分は人間の最

下級の奴隷であつたのに、突然宮中に連れられて、今は大王の第一夫人となつた。婦女子としてこれ以上のない身分となつた。これは一體何の原因から起つたことか知らん。自分で善いことをしたと思ふて、大に喜んだことは唯だ一度ある。かの偉大な沙門に晝飯を供養したことである。あの方が妾をこんなにして下されたのかも知れないわ。あの大沙門は何處の御方か知らん。一應老女に尋ねて見ましやう。「これ〜老女や。お前はどの舍衛城の邊りに、御身が偉大で徳相の具つた沙門のあることを知つてをりますか」

老「そのやうな方なれば吃度お釋迦さまで御座りましよう」

夫「そのお釋迦さまは只今何處に居られまするか」

老「お釋迦さまならば祇園精舎に在らせられまする」

夫「そんならそのお方に御禮参りいたしたいから、大王にお願ひいたしましやう」と云ふて、自ら大王の御前に出られ敬禮して云ひました。

「妾は祇園精舎のお釋迦さまに、参拜いたしたう御座いまするから、御許しを願ひまする」

王「ア、宜ろしい。併し今日は参拜に遅いから、明日正時に参るがよい」

と命ぜられて、大王より別に命を下して、行啓の道筋を掃除撒水せしめられました。翌日末利夫人は五百の侍女や、侍臣に護衛せられて祇園精舎へ参られました。夫人は進んでお釋迦さまの御前へ出で、禮拜して拜顔いたしますると、全く自分が奴婢の時供養した大沙門でありましたので、非常に喜んで喜びの餘りに涙を流し、敬禮して申上げました。

「世尊釋迦牟尼如来さま、妾は御承知の如く奴婢でありました。それが何うして一國大王の第一夫人となることが出来ましたのでしょうか」

「又妾は醜いのに、外の美人の方が願ふてもなれない富貴の身分に、なることが出来たのでしょうか。」

お釋迦さまは靜に御答へになりました。

「貴女は低い身分から、最も高い身分になることの出来たのは、過去世より謙遜の心を以て他に攝し、賢者を敬ひ下々の者等に満足を與へるやうに、十分に勤められた原因の然らしめたものです。又貴女の他に比して醜いのは、前世他に對して怒りや嫉妬の心が、強かつたからであります。柔和で瞋りや嫉妬のない心が、美人となる原因であります。貴女が世界に稀な富貴の身分となられましたのは、如來や菩薩に供養し他に施す心が原因となつたものであります」

とそれからお釋迦さまは三寶の最もあり難い理由と、人間として五戒を護らねばならぬことと、それ等を護る尊い功德などについて、御説きになりましたので、末利夫人を始め五百の侍女等が、お釋迦様から三歸五戒を授けまして、眞實の優婆私迦となり、皆法眼淨を得て大に喜んで、敬禮して宮中に歸りました。

末利夫人の娘に勝鬘夫人と云ふ方がありまして、阿踰闍國の友稱王の王妃となら

れた方で、非常に有名な方で、後世勝鬘經を説かれたとせられる程の賢夫人でありまして、佛教の大義を宣揚せられた所の偉大なる婦人でありました。

二三、如來父大王に遇ふ

お釋迦さまは四十一歳の時、喬薩羅國の波斯匿大王が、淨飯大王に書を送つて云ひました。

「大王の太子は甘露の法を得て、佛陀となられましたして衆生を化度して、只今舍衛城の祇園精舍に留錫してをられます」

それから淨飯大王は使を幾度も釋尊に送つて、迦毘羅衛城に還へられるやうに請はれました。何の使者も釋尊の處へ参りますると、皆出家得度して大王の處へは還らず又釋尊も御歸りにならなかつた。父大王は更に烏陀夷を遣はして、

「我及び親族を慈愛するために歸城せられたい」

と云ふ勅書を贈られました。烏陀夷は世尊に遇ふて書を上り、それから舍利弗に隨

よて出家得度して彼の弟子となりました。彼は修行の結果神通力を得ましたので、一瞬間に迦毘羅衛城に着いて、光榮ある法服三衣を着けて、大王に遇ひましたので大王はその威儀整然たるを見て、不思議に思はれて、

「悉達太子もお前のやうに立派であるか」

鳥「私は最小な者です。恰も須彌山に對する芥子粒のやうです」

と云ひましたので大王は大に喜びました。次で大王は

「太子は歸へらるゝであらうか」

鳥「勿論御歸りにはなりません、王宮には御住居になりませぬ。精舎に居られましよう」

王「精舎とは」

鳥「精舎はこのやうに造ります」

と申上げて祇園精舎の縮圖を作つて差上げました。其圖に依て、大王は尼俱盧陀樹

林に精舎を建立しました。

その事を知られました世尊は、目連尊者に御命じになつて、大衆に告げしめました。

「如來は今日父大王に遇はんために、迦毘羅衛城に行かれる。參列しようと思ふ者は、法衣を着けて俱に來よ」

と、かくて千二百五十人の比丘が隨行しまして、世尊と俱にロヒタ河の岸につきました。豫てかくあらうと知つてをられました大王は、その地と尼俱盧陀精舎との間の行路を掃除し、白檀香水を散せしめて、世尊の一行を尼俱盧陀精舎に奉迎いたしました。

王家には今尙ほお釋迦様の叔父に當る方や、母方の祖父や伯父などもありまして彼等自身は考へました。悉達太子は佛となつて歸つても、彼は我等より眼下の者であるから、我等を敬禮せずばなるまい。と云ふ驕傲の念を有つてをりました。これ

等の考は直にお釋迦さまの知る所となりました。そうしてお釋迦さまは彼等をして如來を輕んずることは罪を犯さしめることとなるのであるから、その考を棄てしめねばならぬと御考になりまして、彼等の前で種々の神變を御示しになりましたから虚空中に泰然禪坐して無比の光明、即ち心界の暗黒までも破る性光を放たれましたので、父大王は驚いて先づ佛陀世尊に向ふて禮拜して、

「世界無比の甘露法を與へらるゝ至大恩徳の佛陀に敬禮いたします」

とて三度禮拜せられましたので、王族の老人等も皆驕傲の心を破つて、大王の例に倣ふて禮拜いたしました。それから佛陀は設けの席に着かれまして、佛陀前生のいろ／＼のことを御説きになりましたので皆喜んで一心に聴きました。

翌朝佛陀は食を乞はん爲に、千二百五十人の弟子衆を引率れて、城中を貧富の差別なしに街から街へと平等に食を乞ふて行かれました。このやうに佛陀が行乞せられたのを見て、市民は一樣に驚いて云ひました。

「王子羅睺羅にせよ、王子の母の耶輸陀羅夫人にせよ、皆端麗莊嚴した象や乗物で行かれるのに、悉達太子は頭髮を剃り、乞食の黄衣を着て町家に食を乞ふは適當でなす」

と云ふてゐる時、お釋迦さまの身から光明が出まして、その發言してゐる人々を照しましたので、彼等は驚いて佛陀の徳を讚歎いたしました。

この市街に乞食のことが、淨飯大王に聞へましたので、大王は驚いて直に佛陀に遇ひに行かれて、叫ばれました。

「尊き佛陀よ何故に貴方はこのやうに、乞食を行ふて恥を我等に與へられまするか」

佛「わが尊き父上よ。總ての比丘が出で、食を乞ふのは、行徳のためでありますから、正しいことであります。」

王「併し我等は彼有名なる三摩多王の子孫ではありませんせぬか。我等の名譽高い種族

の中には、このやうな無作法を行ふた者は一人もありません」

釋「わが尊き父上よ。光榮ある三摩多王の子孫と云ふことは陛下と陛下の御一族の事であります。佛陀の系統は全く王家の系統とは違ひます。諸佛の系統は修徳の系統でありますして、王家の血を重んずる系統とは、根本から異なつてをります。過去の諸佛は行徳のために、常に平等に食を乞はれたのであります」

行徳のため行乞は

諸佛比丘等の常習なる

平等眞理に相應する

乞食行は善きわざぞ

これを忽諸に附すなれば

比丘の系統亡ぶなり。

と説かれましたので、淨飯大王は預流果を得られた。それから父王と共に王宮に入られて、

正法と一致したる行乞は

善行にして今世後世に

幸福を得ん然らずば

全く行乞を廢止せよ

と説かれたので大王は一來果を得て、喬曇彌夫人は預流果を得ました。

大王は佛陀とそのお弟子たちを宮中の上席に請待して、用意の食物を供養しました。宮中の女たちは皆お釋迦さまを拜がむために、大廣間へ出て参りましたが、耶輸陀羅夫人は他の人々のすゝめもありましたけれども、出て行ずに彼女の室に留つてゐて申しました。

「もしお太子様が妾が正しく貞操を守つてゐたことを御存知ならば、彼方自ら妾の室を御訪ひ下さるでしよう」

この思を御知りになつたお釋迦さまは父王に對して、

「私は耶輸陀羅夫人を訪問して、夫人に歸敬の縁を得せしめましよう」

お釋迦様は舍利弗目連の二大弟子を随へて、父大王の御案内で夫人の室に行かれて席に着かれますと、夫人は自分が貞操を全ふしてゐたことの、證明を得ましたことについて感激しました餘りに、お釋迦さまのみ足の下に伏ふれて、み足を額に幾

度か頂きました。さうしてお釋迦さまは父大王に向ふて、耶輸陀羅夫人は前世から善く婦道を全ふした、婦人であつたことを説明せられました。

二四、釋迦族多數の出家

お釋迦様の叔父甘露飯王の子に、阿難陀と云ふのがありました。觀相家等はその子を見て、お釋迦さまの侍者となるであらうと云ひました。それを忌み嫌ふた父はお釋迦さまの迦毘羅衛城に歸へらるゝことを知つて、その子をお釋迦さまの行かれない、吠舍離國の村落に隠しました。お釋迦さまは此事を御存知になりまして、阿難陀の居る處へ行かれますと、隠蔽してある家の戸が自然に開きました。阿難陀は手に團扇を持つて出て來まして、お釋迦さまを見ますと、直に禮拜して世尊を團扇で扇ぎました。

世尊が歩み出されると、その後隨うて行きますので、侍臣は驚いて強く制止しましたけれども、聞かないで隨行しますので、已むことを得ず象に乗せて隨は

せました。彼は十力迦葉波について出家得度しました。

父大王は考へられました。お釋迦さまの親弟孫陀羅難陀をして王位を繼がしめやう。彼は將來轉輪聖王となる徳ある者であると。然るに或時世尊は孫陀羅難陀の戸口に立たれて呼ばれたので、彼は非常に彼の美なる妻を愛して、寸時も彼女と離れることが出来なかつたけれども、釋尊に呼ばれたので外に出て禮拜し、鉢中に食を盛つて供養しました。お釋迦様はわざとそれを受取らないで、それを彼に持たしめて、尼俱盧陀精舎に歸られました。さうしてお釋迦さまは彼に對して、

「お前は出家得度するか」

「ハイ致しませす」

と對へて直に得度せられました。彼はお釋迦さまを歡ばすために得度したのでありますから、直に家に歸らうと思ふて、歸路について見たが、お釋迦さまの神通力で道が解らなくなつて、どうしても歸へれないので、歸宅を斷念して出家比丘とな

つてゐました。

そこで父大王はお釋迦さまの子の羅睺羅をして、王位を繼がしめようとせられたけれどもお釋迦さまは、その子を出家せしめようとして、耶輸陀羅夫人の供施した晝飯を受けに行かれた。彼女は他をして自分の意の如くにならしめる咒藥歡喜丸を羅睺羅の手に持たしめて、食と共に釋尊に獻ぜしめました。お釋迦さまは平然として、その食も歡喜丸も召し上られて、何事もなく起つて歸路につかされると、突然羅睺羅は、

「父上私に遺産を下さい」

と言ふて隨いて参りました。そうして少頃して精舎に着きました。お釋迦さまは舍利弗を呼んで言はれました。

「この子は滅亡する遺産を求めてゐるが、私はこの子に滅びない財産を與へようと思ふてゐる。私が佛陀伽耶で積み得た眞實不滅の寶を與へるであらう。依てこ

の子を出家得度するやうにしなさい」

と命ぜられました。彼は目連と二人で羅睺羅の頭髮を剃つて、出家得度せしめました。さうして大迦葉波尊者が沙彌の本務を説明して教示せられました。

耶輸陀羅夫人は外道師の作つた歡喜丸を、我子よりお釋迦さまにさし上げて、自分に愛を受けようと謀りましたが、何の効力がないのみでなく、羅睺羅さへ連れて御歸りになつたと聞いて、失望の餘りに高樓の上から身を投げました。けれど、お釋迦さまは神通力で、それを虚空に御助けになつて、それから無着無貪欲清淨の法である、四諦を説かれましたので、彼女は了解して預流果を得ました。

淨飯大王は嘗て悉達太子の出家を防がうとして、種々に手を盡しましたけれども遂に出家せられた悲みを見ました。亦彼太子の弟孫陀羅難陀に王位を繼がしめようとして、これ亦出家せられたので大に失望しました。今亦孫の羅睺羅をして王位を繼承せしめようとしたに、亦亦出家せられたので愈々絶望となつて悲歎しまし

た。大王は自らこれ等の事を勝え忍ぶことが出来ないので、お釋迦さまの所へ行か
れまして申しました。

「今後人の子は兩親の許可なくしては、何人も出家することを許さないと云ふ規
律の制定を願ひたい。今日以後親として私の如き苦痛を、受ける者がなからしめ
たいと願ひます」

と、お釋迦さまは父大王の請求を承諾せられまして、それから父大王のために説法
せられた。次に佛陀は諸弟子を集めて、

「比丘衆よ今後兩親の許可を得ない者に、誰も出家得度せしめることを許しませ
ぬ。この規則を破る者は罪を犯すこととなります」

お釋迦さまの叔父斛飯王に摩訶那摩と阿那律の二人の王子がありました。或時二人
が相談して、

「何れか一人が比丘とならば、他はそれの遺産を受ける」

と云ふことを約束して阿那律は比丘となりました。この事が知れてから、釋迦族の
子弟等は、離婆多、善星、金毘羅、跋提、提婆達多などを主として、五百人の子弟
と、理髮師の優波離に至るまで、出家得度しました。

二五、淨飯大王の崩御と婦女子の出家

お釋迦さまは迦毘羅衛城の化度を了へて、王舎城へ御出になりました。その年の
雨安居の最中八月に、淨飯大王は非常な重病に罹られました。日夜通じて苦まれ
たので、大王自らも臨終に間のないことを知られて、生前に是非とも我子の釋尊に
御遇ひしたいと願はれました。世尊は毎朝大慈悲の心を以て、一切衆生の心情を
觀察したまふたので、その朝も例の通りに御覽になりますと、父大王の悲痛の實
情を知られましたので、大王の病床を御見舞しようとして、阿難陀尊者を呼んで、
一群の優秀なる比丘衆を集めまして、直に神通力で空を飛行して、宮中の庭前に降
りられました。それから少しの猶豫もなく、直に父大王の病床に見舞はれました。

お釋迦さま威徳莊嚴の御手を以て、父大王の頭に按じて念ぜられますると、今まで苦しみ惱んで居られた大王御自身の病苦は、忘れたやうに癒えられました。但し衰弱は依然として加つてをりました。最早一周間の餘命しかないと云ふことは明らかでありました。

お釋迦さまはこの最上の機會に於て、一切の物は無常で生滅變化の已まないことや、一切苦惱の根本原因は我と云ふ無明であることや、その無明を根滅することは正道の智慧に依ることなど、微妙な佛道の有がたい眞理を、説明になりましたので、淨飯大王は聖果を得られました。七日の間寂靜なる幸福に御過しになりました。お釋迦さま四十一歳の時の八月十五日に、九十七歳の御高齡で御崩御になりました。

宮殿で集つた婦人で喬曇彌夫人を始め、三千の宮女等は心臓も張り裂けるほど悲痛に堪へないで、髪を亂し胸を打ち、大聲を擧げて泣き叫びました。が併しお釋迦

さまはこれ等の人々を靜かに慰めて、

あらゆるものは常がない、

生るは滅ぶる 規律である

生るとほろぶとを兩滅して

寂靜の安樂はかゞやくのだ。

「皆の者。歎くよりは能く無常の理を觀じて、常住不變の涅槃の樂を得るやうに

せよ」

と親切に細々と事分けて御説きになりましたので、多くの者は法眼淨を得ました。

佛陀は大迦葉に命じて、遺骸を荼毘(火葬)する處を準備せしめられました。葬儀は宮庭から荼毘場まで、悲しき奏樂のうちに壯嚴に行はれました。荼毘場に於て佛陀自ら棺を受取りになりました。それを薪材の上に置かれて、佛陀御一人にてこの薪材を燃やすと云ふ、光榮ある業を行はれました。集つてゐる人々はお釋迦さまの報

恩孝行の手厚いのに、皆感涙を催しました。さうして火を點け終るとお釋迦さまは集會の人々に對して、淨飯大王の徳を一言も言はずして、只だ正法のみを御説明になりました。それで集會の多くの人々は解脱を得ました。

喬曇彌夫人は夫の大王が崩御になられてから、痛切に無常を感ぜられて、遂に浮世を棄て、佛門に入つて、比丘尼の生活をしたいと云ふ希望を起されました。それから夫人はこの志願を以て、お釋迦さまの前に出まして、

「出離したいと願ひます。何うぞ出家得度を許して、比丘尼にして下さう」と願ひました。するとお釋迦さまは、

「婦女子は身も心も小であつて、愛着心が大きいから、菩提道を得ることは容易でない」

と仰せられて、三度まで願はれたのを、遂に御許可を與へられなかつた。さうしてお釋迦さまは迦毘羅國を出立して、吠舍離國大林中の重閣高堂に行かれました。

元來迦毘羅衛城に於ては、阿那律提婆達多等五百の青年が出家したので、彼等の妻妃は皆若後家となつてゐた。印度では後家は再嫁の出来ない習慣になつてゐる。故に彼等は皆彼等の夫と同じく、出家得度したいと云ふ希望を有つてゐた。それで彼等一同は喬曇彌夫人を尋ねて、自分等の目的を陳べて、

「妾たちの志願を成就するやうに助力して頂きたい」

夫人はその依頼を承諾して、自分も同じくその仲間入りをする決心あることを示されました。さうして眞實に道を求むる決心の強固なことを示すために、皆様と一緒に黒髪を切つて疎末な衣をつけて行きまじやう。嘗て慣れない徒歩旅行で疲勞を極めながら、非常なる困難を犯して遂に吠舍離にまで着きました。圓頂粗衣疲勞にやつれ塵にまみれた姫たちは、大林精舎の門に到着して、

「阿難陀尊者に御眼にかゝりたい」

と申入れました。阿難陀は親しく妃等に面會して、彼等の困難を侵して來た敬虔な

る旅行の目的を聞とり、直に御釋迦さまの所へ参りまして、

「伯母君始め多くの妃たちの感心に堪へない熱心な願ひを、御許しあらんこと御願ひ申します」

お釋迦様はその事を静に聞かれて、少頂黙して居られました、

「阿難陀よお前は婦女子入團の許可を願ふてはならぬ。彼等を教團に入れるならば正法千年が五百年に短縮せられるからである。」

阿「併し喬曇夫人は世尊誕生後、世尊の實母は七日で早世せられ、その後實母に代つて養育せられた、如來に對して大恩あるかたであります。又他の妃等も貞操堅固清淨無比の方のみです。その上過世の諸佛には比丘、比丘尼、優婆塞迦、優婆私迦の四衆があります。今世尊には足らないのは比丘尼衆であります。何卒それを新に附加へて、その數を満足して頂きたい」と熱心に願ひましたので、お釋迦さまは

「彼等にして八重禁戒を持つならば許してやらう」

阿難陀はこの許可に躍り上つて喜び、謝禮して直ちに門外に出で、待ちあぐんでゐた彼女等に御許しあつたことを告げました。この新しい善い知らせに驚喜した喬曇彌夫人は皆の妃に代つて云ひました。

「今までも許されなかつたかと心配してをりましたが、この許可を承つてその嬉れしさは、譬へるに物が御座りませぬ。世尊の御制定下さる八重禁戒を、香が高い花環を頂いたやうに、亦掌中の寶珠を戴いたやうに、大切に御受けしてお護りいたしますから、妾たちを教團に入れることを御許し願ひます」

これに依て愈々比丘尼衆が出来て四衆完備いたしました。つゞいて耶輸陀羅夫人も多くの侍女を引率して、入團して比丘尼衆となりました。

二六、善星比丘の邪見、阿難陀侍僧となる

世尊の叔父白飯王の太子に善星と云ふ者がありました。又の名を龍護と呼ばれま

した。一説に世尊の在俗時の御子とありますけれども確實なる根據がありません。この善星は神通力あつて空中を飛行し、又學問にも勝れてゐて、一千人の外道の論議を打破つた程の人である。けれども正因正果の眞理を信ぜず、お釋迦さまに對しては、何を説明せられても反對して、我見を通うす人であつた。このやうに我見を固守して正見に和すること出来ない人は、邪道に陥る運命を有つてゐるとお釋迦様は大迦葉波に告げられたことがあつた。或人は如來に申し上げました。

「善星比丘は十二分教即ち一切藏經を暗記してゐるのみでなく、四禪に達し欲界の煩惱を降伏してゐます。然るに如來は彼を以て邪見者流として、この劫波中墮獄すると説かれますが、彼は既に正法に歸依したる者なれば今や如來は大慈悲を以て救濟せられませぬか」と尋ねました。その御答へに

「邪見の人は如來の大慈方便を防止して、自から求めて深坑に墮つる者である」

と言はれました。或時釋尊は王舍城竹林精舎に居られました時、頻毘沙羅王が四ヶ月間如來に供養いたしました。それを見た裸體子は大に憂へ悶へました。善星はその憂悶の状態を見てから、お釋迦さまの前に來て云ひました。

「裸體子は阿羅漢となつた」

と、併し如來は仰せられました。

「彼は阿羅漢となつたのではない。憂悶してゐるのである」

善「何故に阿羅漢が他の阿羅漢に嫉妬しますか」

世「私は阿羅漢に嫉妬をせない。事實を言ふのである。彼裸體子は七日の中に食物が咽喉に塞つて死ぬであらう。死んで後食嘔吐餓鬼に生れて苦むであらう」と聞いた善星は彼裸體子の所に行つて、

「長老よ、沙門喬多摩はお前のことを豫言した。お前は七日の中に死んで後に食嘔吐餓鬼に生れて苦むであらうと。だから、注意しなさい。さうすれば喬多摩は

虚言を云ふたことになるから」

と告げましたので、彼は六日間全く絶食してをりましたが、七日目に甘蔗の汁を吸ひ、水を飲み喉を塞いで死にました。彼の屍骸は寒林に運び去られました。その屍骸の前で彼は食嘔吐鬼となつて居りましたが、善星は彼の處に来て尋ねました。

「お前は死んだのか。何の原因で死んだのですか」

鬼「そなたは善く注意して聞きなさい。如來は徳義を以て事實を話して下されたのに、そなたは何故に信じなかつたか、衆生にして如來の言を信じない者は、遂に我の如く苦むであらう」

善「何んだ。お前はこのわしを憂に沈めるのか」

と云ふて去りました。併し彼裸體子は懺悔に依て苦患の身を脱れて、善處に生れて行きました。又世尊は説かれた。

「私は彼善星に對して正法を説明したけれども、彼は一偈も信ずる心を起さなかつた。この邪見に依て彼は遂に四禪果を失ひ。彼自ら佛もなく法もないと言ふに至つて、三惡道に陥るのである」

大迦葉波は佛に尋ねました。

「彼善星は斷善根の者なれば、何故に出家することを御許しになりましたか」

佛「もし彼をして出家せしめなかつたなれば、彼は王となつて佛法を破滅する者となつたであらう。それ故に彼に出家を許したものである。

彼は世智辨聽の人であつて、世尊の言はれた如く、一切藏經を暗んじながら、死んで惡趣に落ちました。

お釋迦さまが五十五歳になられて、娑羅林中にをられた時のことです。お釋迦さまは仰せ出されました。

「私は年老いたから一の侍僧を得たい。誰か侍僧になる者がないか」

善星比丘の邪見、阿難陀侍僧となる

と云ふことを大衆に告げられました。ところが舍利弗と目連とは第一に、

「私は侍僧となつて御事へ致します。どうぞ私に御命じ下さい」

と願ひ出しました。それについて侍僧とならうと願ひだした者が七十餘人に及びました。けれどもお釋迦さまはその一々に對して、

「お前は今後衆生のために説法して、教導せねばならぬ必要な身分であるから、侍僧とすることは出来ぬ」

と云はれて御許しがなかつた。その侍僧として最も適當な者は阿難陀であつた。彼は一切藏經を暗記するために、嘗て尼連禪那河の岸に於て三昧に入つてゐた時、眼科醫官作のために強く頭を打たれたけれども、全く知らなかつた程一心になつてゐた。彼は五百生を費して暗記することが出来る程の量で、六萬部の論書を記憶して、善く微細に徹入した學者となつてゐた。

時に目連尊者は阿難陀が侍者として最も適任であり、且又お釋迦さまの御意向も

亦そこにあることを知られて、舍利弗尊者に相談してから、阿難陀に對して、

「貴僧は世尊の侍僧と成りなさい」

阿「世尊は六つかしいから、私は侍僧となることを願ひませぬ」

目「併し衆人の見る所でもあり、世尊も貴僧を侍僧としたい御思召しがありますから、全く適任であります」

阿「然らばこの三ヶ條を御承諾あらば侍僧となりませしやう」

第一、如來の衣を私に與へないこと。

第二、如來に供養した食物は私は食はないこと。

第三、時と非時とを擇ばず、何時でも如來の前に行くことを得ること。

目連はこれを委細如來に申し上げましたところ、如來は、

「阿難陀は智者である。その次第は始の二要求は、衣と食とのために侍僧となつたと云ふ、世人の誹讒を避けんためであつて、後の一條は他の人々をして、如來

に遇ふに時と非時とある事を知らしめるためである。これ等は三條とも彼自身の利益のためではないから、三條とも許して侍僧とする」

と仰せられました。それから阿難陀は世尊に随ふて、侍僧となつて事へました。阿難陀が多聞第一となつたのは、一つには彼が記憶力の優秀なるに依るけれども、亦一つには侍僧となつて、如來の一言一句も常に如來に侍して、注意し憶念したにも依ることである。尚ほ阿難陀が侍僧とならなかつた以前で、彼が聞かなかつた集會の説法の一々について、特に如來から一々詳細に聽聞したものである。それ故に如來の滅後第一結集(經典編纂大會)の際には撰ばれて、諸經典の宣唱者となつた所以である。

二七、外道六師の神通挑戰

お釋迦さまが五十七歳になられた年の冬、王舍城竹林精舎にをられました。佛陀が成道せられてから此時に至るまで、多數の神や人を濟度せられて、廣く正法を

廣められましたので、印度に於ける九大王は、お釋迦さまやそのお弟子たちを供養しました。

この時代の宗教を奉ずる哲學者の主なる者で、異なる主義を主張する者が六つありまして、佛敎から外の道でありますから、外道の六師と名づけました。通俗語に外道と申すと大へん悪く卑しめて悪魔と言ふのと、同じ様に思はれてゐますけれども、こゝには佛敎が内道に對する外の道と云ふ意味だけで、別に悪く卑しめた意味がありません。この外道の六師等はお釋迦さまがあまりに盛大なので、嫉妬心を起し心意を惱ましてをりました。それに惡魔の王は外道六師の心を鼓舞激動しまして、世尊と神通を競争する心を起さしめました。

それから成就作等の外道の六師は、俱に頻毘沙羅王の前に行きまして申しました。

「我等と喬多摩とは俱に智者として、世間から知られてゐる者であります。です

から我等は彼と神通を競べることを願ひます。大王陛下よその準備をして下さ

し」と聞かれるや否や、大王は、

「ウワハハ、それは飛んでもないことを願ひ出したものだ。お前等がお釋迦さまと神通を競べようツテ。太陽の前の螢だ……止すが善い」

六「イヤそのやうな批判は勝負の後に願ひたい。今日より七日後に我等は佛陀と神通を競べましょう」

玉「そんな事をすればお前等が恥を騒ぐであらうと思ふて言ふたまでだ」

六「恥は何れが掻きまますか。我等には真劍の問題であります。速に御準備を願ひます」

そこで頻毘沙羅王からお釋迦さまにその事を申上げました。お釋迦さまの御答に、

「私は正しい時を知つてゐるから許しておきなさい」

それから六日を経て愈々明日となつたその日に、お釋迦さまは瞻波國に行かれまし
た。六師等も亦その後を追ふて行きまして、その國の因陀羅跋摩王に以前の如くに
競争神通を願ひました。それから六日の後お釋迦さまは、亦その國を出立せられて
吠舍離國に行かれました。六師も亦行つて、その國の梨車茂政務官に競争神通を願ひ
ました。併しお釋迦さまは六日の後喬賞彌國に行かれました。その國でも同じく國
王に競争神通を願ひましたが、これ亦以前の如くお釋迦さまは婆羅泥斯國に行かれ
ました。六師等はその國の梵施有王に願ひましたが、又六日の後お釋迦さまは迦毘
羅衛城に行かれました。迦毘羅衛城でも同じ事を繰り返へして、舍衛城に行かれま
した。

このやうにそれからそれへと移行行かれましたので、六師等は非常の慢心を起し
まして、その途上に於て頻毘沙羅王に向ふて、

「喬多摩と神通を競争せしめよ」

と強く請ひました。遂に王は強い決心を以て、

「汝等再びこの事を強請するに於ては流罪に處するぞ」

と嚴命しました。そこで彼等は、

「この王は喬多摩の身方をしてゐる。波斯匿王は公平無私だと聞いてゐる。彼處に行かば我等の目的を達するであらう」

と喜び勇んで世尊の後を追ふて、舍衛城に向ひました。世尊は舍衛城祇苑精舎に着いて住せられました。時に頻毘沙羅王は五百の童子と四萬の兵卒とを隨へ、梨車蔑族は五百の童子と六萬の兵卒とを隨へ、優多羅衍那王は八萬の兵卒等と驍地多王は五萬の兵卒と、因陀跋摩王は六萬の兵卒と、梵施有王は八萬の兵卒と、釋氏は五萬の兵卒とを率いて到着したので、舍衛城の内外の地は人を以て埋つてしまひました。六師等は波斯匿王の前に出まして、

「從來沙門喬多摩は我等と神通を競争する時になりますと逃げ出しましたこと六

回に及んでをります。それでその國々から隨つて來た者も、非常な多數に上つて居ります。唯だ大王陛下は大地と同じく、何れかを好惡することなく、公平に事を處せられると聞いてをります。もしこの競争に於て喬多摩が勝ちますならば我等は彼の意の通りになります。私共が勝ちますならば、彼を私共の意の如くにすることを御許し下さう」

王「なぜそのやうな事を願ふか。お前等のやうな無學卑賤の者どもが、法の大王と神通を競争しようなどとは、狂氣の沙汰じや……止せ止せ……」

六「大王も亦喬多摩に欺かれてをられます。その勝敗の如きは競べて後に明白になります」

王「然らば我はその事を世尊に申上げるであらう」

と言はれて、その後王は三度この事を世尊に申上げました」

世尊は御考へになりました。この地は過去の諸佛も大神通を現された因縁の深い

土地である。こゝで神通を現すことは甚だ適當である。又七日の後には他の多數の衆生等も集るのであるから、彼等をして佛縁を増長せしめるであらうと知られまして、仰せられました。

「大王よ七日の後には彼等の願の如くに行ふであらう。大王は廣い土地を撰んでこの本堂でない所の廣大なる集會場を作りたい」

とそこで大王はこの事を六師等に報告して、後に大天幕を作る材料を集めてゐた。六師等は相談して云ふた。

「喬多摩は亦逃げるか。或は他の助力者を捜すであらう。併し今度は必ず助力者を求めるであらう。故に我等も助力者を求めねばならぬ」

と相談一決して助力者を求めだしました。彼等は大力國の普行者最賢の所に行つて、

「貴方は我等の友となつて、喬多摩と神通を競へて下さる」

普「我は嘗てマンガキー河岸に乞食して、阿耨達池の邊りで食ふてゐた時、舍利弗の弟子沙彌のカンタガリが糞掃衣を持って来て、阿耨達池の神に渡して洗濯せしめた。それを彼沙彌が受取つて持ち行く時、その水滴が我頭に落ちた。我等は彼の弟子の弟子にも及ばない。汝等は彼大神通者と神通を競争しようなどとは以ての外だと」

と云ひました。それから六師等は彼を棄て、雪山の邊りに住する五百人の仙人に助力を求めました。彼仙人等は承諾して、

「時が来たならば報知せよ。我等は行くであらう」

二八、如來大神通を現して六師を降伏す

その頃波斯匿王の臣下にクリシユナと云ふ者があつて、王に對して反逆を謀つた。その事露はれて執法官に手足を切斷せられて刑場に捨てられた。彼の親戚朋友等は六師等に對して、請願して言ひました。

如來大神通を現して六師を降伏す

「貴方等の眞言を以て、この切斷せられた身體を、元の如くに還へして下さい」と、けれども彼六師等はその法力がないので、何も言はずに去りました、時に阿難陀はそこを過ぎますと、彼等は同じ事を阿難陀に言ひました。阿難陀はお釋迦さまに申上げました。すると釋尊はこの眞言を至心に唱へよと云はれて示されたものは、

「私がこの三寶の最勝なることを、現に信ずる力を以て、この五體は元の如くになれよ」

でありました。その如くに阿難陀が云ひました所が、クリシュナの肢體は元の如くに癒へて、苦痛も亦なくなりました。それ故にこの事實を見た所の人々は、

「阿難陀は六師に勝つた」

と言ひました。それからお釋迦さまはクリシュナの爲めに、説法せられましたので彼は不退轉果を得ました。波斯匿王は彼を再び臣下として用ひませぬので、彼の住

處を祇園精舎の中に建て、切斷精舎と名づけた。彼はこゝに住んでお釋迦さまに奉事して、神通力も得ました。

波斯匿王は舍衛城から祇園精舎に至るまで、數町の廣さに渡つて大神通競争場として、百千の大布を以て大天幕を建てました。内外に白檀香水を以て撒布し、旌旗勝幢を飾り、絹布製の華鬘を莊嚴し、天人の歡喜宮の如くに輝かして、その中に釋尊の御座として、七寶を鏤ばめたる黄金の獅子座を作り、外道六師の座としては、その各派に適合する所の色布を以て、覆ふた座を作りました。

愈々七日を経まして神通競争の當日となりました。この一大事件が印度國の遠近に傳はりましたので、馬や象や車に乗つて見に来る觀衆は、とても收容し切れない程に大多數の人が、舍衛城の内外に集つて参りました。外道の六師等は早朝から威氣揚々として、大神通競争場に参りまして、使者を波斯匿王に送つて云はしめました。

「大王陛下よ、我等は最早こゝに到着してをります。早く沙門喬多摩を呼び寄せて下さい」

とそれで波斯匿王は大臣等と俱にその事を聞いて、大神通競争會場へ行きました。さうしてお釋迦さまを迎へるために、婆羅門子弟の教師を送られました。これが十二月の一日でありました。

世尊は鷲王の如くに空中から、神通競争場に御越しになりました。この事を見た所の波斯匿王は外道六師に對して、

「世尊は既に神通を現はし給ふた。今度はお前等の現す時だ。早く神通を示しなれよ。」

六「陛下よ。こゝに多數の人々が集つております。あの神通變化は誰が現はしたか不明であります。沙門喬多摩であるか。我等の中の一人であるか。誰も判定することが出来ませぬ」

時に切斷精舎の主は、神通力を以て香山から、阿牟羅樹の白葉で飾つて鳥の鳴き聲するものを持って来て、會場の北側の上に置きました。又惡戲賢施長者は神通力を以て、天上の如意寶珠を取て来て、會場の南側の上に置きました。彼等は自身の形相を現はしませんから、誰がいたものか一般には知れてゐなかつた。波斯匿王は如來のせられたものだと思ふて、

「六師よ世尊は神通を現はしたからお前達も現はしなさい」

六「陛下よ此神變は誰が現したか。何人も判斷出来ませぬ」

と云ひました。時に現神通を見るために集つたのは、無數の人間のみでなく、多くの神々までも集りましたので、空間中は塵埃と臭氣とに満ちてをりました。それでお釋迦さまは一旦祇園精舎の講堂へ歸られました。それから大講堂に火光を放つて大講堂内外の總てを火光を以て、その塵埃臭氣を焼拂らひました。現今の所謂火熱消毒を行はれたものであります。然るに六師等はこれを以て己等が現はした神通

如來大神通を現して六師を降伏す

として云ひました。

「陛下よ。我等は今この神通競争大會場を焼きます。然るに沙門喬多摩がこの火を滅することが出来なければ、何うして彼に神通力があると云へまするか」

時に波斯匿王始め末利夫人並に大臣等より、他から集まれる王者に至るまで、佛敎僧者の方は何も言はずに憂に沈みました。けれども六師等は威氣顯揚として、その弟子に至るまで皆大に喜びました。併しながら世尊神通力の火は、その大會場内外の塵埃臭氣を燒盡して自然に消えました。そうして會場は明徹清淨にして、以前よりも非常に美はしくなりました。されば大王は大に喜んで六師等に對して、

「世尊は既に神通を現はされたから、お前等も亦現はさねばならぬ」と迫りましたけれども、彼等は意氣阻喪して黙つてゐました。

その時お釋迦さまは大神通競争會場に御着になりました。波斯匿王は供養の品を奉つて晝飯を供しました。世尊が杖を地に突き給ふと、それが七寶の大樹とな

り高さも大きさも共に五百尋あるものとなり、花の大きさ大車輪の如く實の大きさ五斗入の壺の如く、香氣馥郁枝葉法樂の聲を出し、光輝日光を覆ひ隠すほどのものが現はれた。これを始めとして種々の大神變を示されたので、多數の人々が佛法を信ずることとなつた。世尊は彼等に法を説かれたので、その機に相應した各自の了解を得た。

第二日は優多羅衍那王が世尊に事へ奉つた。世尊は會場に着き給ふと、御身の左右から壯麗なる寶石の大山が、五種の色光燦爛として現れました。右の山には樹林鬱蒼として、諸の華花満開して多數の有味が實のつてゐる。亦多數の人々がそれ等を賞味してゐる。左の山には無數の綠草繁生して、多數の獸類が喜び勇んで草を食ふてゐた。

第三日は駿地多王が世尊に事へ上つた。世尊が御顔を洗はれたその水を撒きますると、その水が忽然變現して、二百瑜膳那ある七寶の浴池となつた。その池中には

種々の色彩ある蓮花が開いて、そのいろくの光明で天地を遍く照らした。會場の衆人等はその浴池を大に喜んだ。

第四日は因陀羅跋摩王が世尊に奉事した。寶石浴池の四邊に於て、八條の水流があつてその池に落つる時に、雄大なる瀧となつて、水聲は法音を出してゐる。そうしてその水は池中で渦巻をしてゐる。

第五日は梵施有王が世尊に奉事しました。世尊の御顔から黄金色の光明を放つて、三千大千世界を照破した。その光明に觸れた所の一切衆生は三苦惱と五蓋から離れて、身心俱に安穩を得ました。

第六日は梨車蔑貴族が世尊に奉事した。世尊は神通を以て會場に於ける衆人をして、各自相互に他の心を知り、各々の善不善の業を知らしめられたので、皆大に満足して歡喜した。

第七日には釋迦族が世尊に奉事した。會場の衆人皆一々各自に轉輪聖王となり、

各々七寶を持ち又一千人の子を有し、多くの小國王を隨へ諸大臣に隨順せられてゐることなどを示されたので、彼等は皆深心より歡喜した。

第八日は因陀羅王が世尊を請待いたしました。世尊が淨香宮に一步を入れ給ふや、直に大地が震動いたしましたので、六師等は大に驚いて、

「今こそ仙人よ補助に来てくれ」

と叫びました。五百の仙人等は報知を送つたのだと思ふてこゝに來ました所が、彼等は佛身の光明昭々赫耀として、日の如くに麗美なのを見て信心を起し、出家得度して次で阿羅漢果を得ました。それから世尊はその五百の阿羅漢と共に、神通競争大會場に行かれて、無數百千の大衆の中に於て、帝釋天が造られた獅子座に着かれました。その時、目連尊者は申上げました。

「私が神通力を以てこれ等の外道を降伏致しませう」
お釋迦さまは仰せられました。

の大衆は瞬きもせず一心に、世尊の神通變化を見て居りましたが、驚歎の餘りに禮拜し、信心歡喜し、香水を散じて供養した。そうして世尊は、

「今や神通變化を消散すべし」

と大聲にて告げらるゝや、忽然として一大壯觀は消散した。波斯匿王は六師に對して、

「如何に世尊は神通變化を示し給ふた。そなた等の時が來た。さあ早く示せよ」と督促するやうに言はれた。時に成就作は默然として黑神子に指示した。黑神子は完勝に完勝は亦無負子に、無負子は背僂迦旃延子に、背僂迦旃延子は亦親戚子に、親戚子は却て復た成就作に指示しました。波斯匿王は三度同様の事を繰返して彼等に迫ると、彼等は一より他に他より他にと指示するのみにて、逡巡咨嗟して意氣阻喪し、一同頭を垂れてなす所なく、唯だ心中に怒氣充滿して身體震動してゐた。

時に世尊は御手を以て獅子座を押された處、大牛の如き大聲を發して、突然十五人の大羅刹鬼が現はれて六師の座を破壊した。そうして金剛手は刃に火の燃ゆる金剛杵を以て、六師の頭上に置いて赤風強雨を送つたので、六師は皆恐怖震慄して逃げ走つた。

黑神子は山の間に隠れ、完勝有は草の繁茂した間に隠れ、無負子は深林中に、背僂迦旃延は倉庫中に、親戚子は神祠中に、成就作は池に飛び入つて自殺した。さうして彼等の弟子數萬人は出家得度して後に阿羅漢となりました。

このやうに世尊は舍衛城に於て、大神通を現はして無數の衆生を濟度せられた。それ故に天上人間の佛教信者等は、後に舍衛城外に於て、示現大神通の記念塔を建立しました。

二九、佛陀女性の化度

頻毘沙羅王の第一夫人で韋提希(ヴァイデーギー)と云ふのがあつた。彼女は自身の

佛陀女性の化度